も、御暇相願候共、又は無祿に而御手當等一切無之、御領地移住相願候共、三ケ條之內、來る廿六日迄に、可被申聞候。

右之通、寄合頭御用人へは、相達候間、其外御家來中へ不洩樣、可被達候。

父の自叙傳

夢醉獨言

勝の父、左衞門太郎の書き殘した、自叙傳とも見るべきものに、『夢醉獨言』といふのがある。是れは、自叙傳といふよりも、實は懺悔錄のつもりで、書いたのであるから、すべて僞らざる告白であり、飾りなき懺悔であつて、徹頭徹尾、赤裸々に、自分の過去を語つて居る所に、頗る味ひがある。

況んや、其人が、海舟の父であり、而もその手記に係るものである、といふのだから、一層、その意義は深いばかりでなく、左衞門太郎の面目が、躍如として、現はれて居る。

海舟を知るには、其父が、どんな人であつたか、といふ事を、知つて置くのも、大いに必要である。而して、父の事を知るには、此記錄を讀んで見るのが、一番に早道であらう。

依つて、玆に、それを揭げて置く事にした。

鶯谷庵獨言

おれが、此一兩年、始て外出を止られたが、毎日毎日、諸々の著述物の本、軍談また御當家の事實、いろ〳〵と見たが、昔より皆々名大將、勇猛の諸士に至まで、事々に天理を知らず諸士を扱ふ事又は世を治るの術、亂世治世によらずして、或は强勇にし、或ははほ惡く、或はおごり、女色におぼれし人々、一時は功を立るといへ共、久しからずして、天下國家をうしなひ、又は知勇の士も、聖人の大法に省く輩は、始終の功を立ずして、其身の亡びし例をあげてかぞへがたし。

和漢とも、皆々天理にてらして、君臣の禮もなく、父兄の愛もなくして、とんよくきようしや故に、全き身命を亡し、家國をも、うしなふ事、みな〳〵天の罪を受る故と、初めてさとり、おれが身を、是までつゝがなく、たもちしは、ふしぎだと思ふと、いよ〳〵天の照鏡をおそれかしこみて、なかなか人の中へも、顏出しがはづかしくて出來ずと思ふは去ながら、昔年暴惡の中よりして、多くの人を、金銀をもおしまず、世話をしてやり、又人々の大事の場合も、助けてやつたから、夫故に少しは、天の惠みがあつた故、此樣にまづ、あんのんにしているだらふ、と思ふ。

息子が、しつまい故に、益友をともとして、惡友につき合ず、武藝に遊んでいて、おれには孝心にしてくれて、よく兄弟をも憐み、けんそにして、物を遣はず、麁服をもはぢず、麁食し、おれが、こまらぬよふにしてくれ、娘が家內中の世話をしてくれてなきも、おれ夫婦が、少しも苦勞のないよふ

にするから、今は誠の樂隱居になつた。おれのよふな小供の出來たらば、ながく此樂はできまいと思ふ。是もふしぎだ、神佛には捨られぬ身と思ふ。

孫や其子は、よく〳〵義邦の通りにして、子々孫々のさかえるよふに、心がけるがいゝぜ。年は九歲からは、外の事をすてて、學文して、武術に晝夜身を送り、諸々の著述本をみるべし、へたの學問よりは、はるか增だから。女子は、十歲にもなつたらば、髮月代を仕習て、おのれが髮も、人手にかからぬよふして、縫はりし、十三歲ぐらゐよりは、我身を、人の厄介にならぬよふして、手習なども して、人並に書く事をすべし。他へかしても、事をかゝず、一家を治むべし。おれが娘は、十四歲のときから、手前の身の事は、人の厄介になつた事はない。家內中の者が、却々世話になる。

男子は、五體を强くして、そしきをして、武藝骨をり、一藝は、諸人にぬき出、ていを逞ましくして、且那の爲には、極忠をつくし、親の爲には、孝道を專らにして、妻子にはじあいし、下人には仁慈をかけてつかひ、勤をばかたくして、友達には、信義をもつて交り、專らに、けんやくして、おごらず、そふくし、益友には、厚くしたひて道をきゝ、師匠をとるなら、業はすこし次にても、道に明らかにして、俊ぼくの仁をゑらみて、入門すべし。

無益の友は、交るべからず。多言を云事なかれ。目上の仁は、尊敬すべし。萬事、內輪にして愼み、祖先をまつりて、けがすべからず。勤は、半時早く出べし。文武を以て、農事と思ふべし。少しも若

き時は、ひまなきよふ、道道を學ぶべし。ひま有時は、外魔が入て、身をくづす。中たちの遊藝には、よる事なかれ。年寄ば心して、少しはすべし。過れば、おれのよふになる。庭へは、諸木を植ず、畑をこしらへ、農事をもすべし。百姓の情をしる。世間の人情に通達して、心にをさめて、外へ出さず守べし。

人に藝の教受せば、弟子を愛して、誠を盡し、氣に叶ぬものには、猶々丹誠を盡すべし。ゑこの心を出す事なかれ。萬事に厚く、心を用ひる時は、天理にかなひて、おのれの子孫に、幸あらん。何事も、勤と覺らば、うき事はなかるまじ。

第一に、利慾は絶つべし。夢にも見る事なかれ。おれは、多慾だから、今の姿になつた。是は手本だ。高相應に、物をたくはへて、若友達か親類に、不慮の事があつたならば、をしまず、ほどこしやるべし。緣者は、おのれより上の人と、緣組べからず。成丈に、ひん窮より相談すべし。おのれに勝ると、おごりかつて、家來は、びんぼう人の子を仕ふべし。年季立たらば、分限の格にして、片付てやるべし。

女色には、ふけるべからず。女には、氣を付べし。油斷すると、家を破る。世間に義理をば、かくべからず。友達をば、蔭にて取なすべし。常住坐臥ともにうはにして、家事を治め、主人のいかうをおとすことなし、せいけんの道に志して、萬愼みて守るときは、一生、安穩にして、身をあやま

つ事は、なかるまじ。おれは是からは、この道を守心だ。なんにしろ、學問を專要にして、能く上代のをしへに、かなふように、するがいゝ。隨分、して出來ぬ事はないものだ。それになれると、しまひには、らくに出來る物だ。けつして、理外の道へいることなかれ。

身を立、名をあげて、家をおこす事は、かんしんだ。譬へば、おれを見ろよ。理外にはしりて、人外の事ばかりしたから、祖先より代々、勤めつゞいた家だが、おれがひとり、勤めないから、家にきづを付た。是が、何寄の手本だよ。今となつて覺て、いく樣も後悔をしたからとて、しかたがない。世間の者には、惡輩の樣にいはれて、持てゐた金や道具は、かしとりにあいて、夫を取にやれば、隱居が惡法で拵らへた道具だから、何返すに及ずといふし、金もまた、其の心持で居るから、ろくに挨拶もせずに、よこさぬは、悟ば向ふが尤と思ふよ。

いかよふの事が出ても、人をばうらむものではない。みんな、こちらのわるいと思ふ心が、かんじんだ。怨敵には、恩を以てこたへば、間違はない。おれは此度も頭より、おしこめられてから、取扱のものどもをうらむだが、よく〳〵考へて見たらば、みんな、おれが身より、火事を出したと、氣がついたから、まいばんまいばん、罪ほろぼしには、ほけ經をよんで、蔭ながら、おれに、つらく當つたと、おれが心得違だ仁々は、りつしんするよふに、祈てやるから、其せいか、此ごろは、おれの體も、丈夫になつて、家内のうちに、なにも、さいなんもなく、親子兄弟とも、一言のいさかひもな

く、毎日〳〵、笑てくらすは、誠に奇妙のものだ、と思ふから、子々孫々も、かうしたらば、よからうと、氣がつゐた故に、ひまにあかして、折々出付た善惡の報ひを、よく〳〵あぢはふべし。

恐多くも、東照宮の御幼少の御事、數年の御なんせん故に、かくの如くに、太平つづき、萬事さかへる、うれひ忘れ、妻子をあん樂にすごし、且は先祖の勤苦、思ひやるべし。夫より子孫は、ふところ手をして、先祖の貰た、高を、取うけて、昔を忘れて、美服をき、美味をくらひ、ろくの御奉公をも勤めざるは、不忠不義ならずや。ここをよく、おもつて見ろ。今の勤めは、疊の上の疊事だから、少もきづかひがないは、萬一すべつてころぶ位の事だ。せめては、朝は早く起き、其身の勤めにかゝり、夜は心を安じて寢て、淡白のものを食し、おごりを、はぶひて、諸道に心をつくし、不斷のきるいは、破れざれば是として、勤の服は、あかのつかざれば是とし、家居は、雨もらざればよしとし、疊きれざれば是として、專らに、けん素にして、よくはすべからず。儉吝の二字を、味ふてすべし。數卷の書物をよんでも、心得が違ふと、やろふの本箱字引になるから、ここを間違ぬよふにすべし。

武藝もそうだ。ふころの業を學ぶと、支體かたまりて、やろふの刀掛になる故、其心すべし、人間になるにも、其通りだ。よくよく迷ふと、うはべは人間で、心は犬猫もどふよふになる。眞人間になるよふに、心懸るが專一だ。文武諸藝とも、みな〳〵學ぶに心を用ひざれば、不殘このかたわとなる。かたわとなるならば、學ばぬがましだ。よくよく、この心を間違ぬよふに、守が肝要だ。子々孫

々とも、かたく、おれがいふことを用ゆべし。先にもいふ通り、おれは之までも、なんにも文字のむづかしい事は、よめぬから、こゝにかくにも、かなのちがひも、多くあるから、よく〳〵考へてよむべし。天保十四、寅年の初冬、於鶯谷庵、かきつゞりぬ。

左衛門太郎入道　夢醉老

氣心は勤身

氣はながく　こころはひろく　いろうすく
つとめはかたく　身をばもつべし
外に
まなべたゞ　ゆふべにならふ　みちのべの
露のいのちの　あすきゆるとも

おれほどの馬鹿な者は、世の中にも、あんまり有まい、と思ふ故に、孫や、ひこの爲に、はなしてきかせるが、能く不法もの、馬鹿者の、いましめに、するがいゝぜ。おれは、妾の子で、はゝ親が、

親父の氣にちかつて、おふくろの内で生れた。夫を、ほんとふのおふくろが引取て、うばで、そだてくれたが、がきのじぶんより、わるさ斗して、おふくろも、こまつたと云事だと、夫におやぢが、日きんの勤め故に、内には居ないから、毎日〳〵、わがまゝ計りいふて、强情故、みんなが、もてあつかつたと、用人の利平治と云、ぢゞいが話した。

其時は、深川のあぶら堀と云ふ所に居たが、庭に汐入の池が有て、夏は毎日〳〵、池にばかり、は入てゐた。八ツにおやぢが、御役所より歸るから、其前に池より上り、しらぬ顏で、遊んで居たが、いつも、おやぢが池のにごりてゐるのを利方ぢゝにきかれると、あいさつに困つたそふだ。

おふくろは、中風と云病ひで、立居が自由にならぬ。あとは、みんな女許りだから、ばかにして、いたづらの、したいだけして、日をおくつた。兄きは、別宅してゐたから、なにもしらなんだ。

おれが、五ツの年、前町の仕事師の子の、長吉と云やつと、凧げんくわをしたが、向ふは、年もおれより、三つばかり多きい故、おれが凧をとつて破り、糸も、とりおつた故、むなぐらを取て、きりいしで、長吉のつらをぶつた故、くちびるを、ぶちこはして、血が大そう流れて、なきおつた。そのとき、おれが親父が、庭の垣根から、見ておつて、侍を迎ひによこしたから、内へかへつたら、親父がおこつて、人の子に、きづをつけて、すむかすまぬか、おのれのよふなやつは、すておかれずとて、椽の柱に、おれをくゝらして、庭下駄で、あたまを、ぶちやぶられた。いまに、そのきづが、は

げてくぼんでゐるが、さかやきをする時は、いつにても、かみそりが、ひつかかつて血が出る。そのたび長吉の事を、思ひ出す。

おふくろが、ほふぼふより來たくわしを、しまつておくと、ぬすみ出して、食てしまふ故、方々へかくしておくを、いつもぬすむ故、親父には、いはれず困つた。逸體は、おふくろが、おれをつれて來た故、親父にはみんな、おれがわるいいたづらは、かくしてくれた。あとの家來は、おふくろをおそれて、親父に、おれが事は、少しもいふことはならぬ故、あばれほふだい、そだつた。

五月あやめをふきしが、一日に五度までとつて、しよ婦打をした。利平おやぢが、あんまりだといつて、親父に、いつけたが、親父がいふには、子供は、げんきでなければ、醫師にかゝる病人になるは、いく度もふき直し、菖蒲を澤山買入よ、といつた故、利平も、菖蒲がなくて困つたと、おれが十六七歳のとき、はなした。

このおやぢも、久しくつとめて、兄の代には信濃國までも、供して行おつたが、兄きがつかつた侍は、みんな中間より取立て、信州五年づめの後、江戸にて不殘、御家人のかぶを買てやられたが利平は隱居して、かぶの金を貰つて、身よりの處へかかりて、かねを不殘、其やつにとられてしまつた。兄きの家へ來たが、ほふばいが、じやまにして、かあいそうだから、おれが世話をして、ぼふづにし、千ケ寺に、だしてやつたが、まもなく又きたから、谷中の、かんのふ寺の、堂ばんにいれてお

いたが、ほどなく死におつたよ。おれが、三十ばかりのときだ。

おれ七ツの時、今の家へ、よふしにきたが、そのとき十七歳といつて、げしぼふすの前がみをおとして、養方の方で、小普請支配石川右近將監と、組頭の小尾大七郎に、初て、判元の時にあつたが其時は、小吉といつたが、頭が、年は幾ツ、名はなんといふと、きゝおつた故、名は小吉、年は當十七歳といつたら、石川が、大きな口をあいて、十七にはふけたとて、わらいおつた。其時は、青木甚平と云、大御番養父の兄きが取持をしたよ。

おれが名は、龜松と云、養子にいつて、小吉となつた　夫から、養家には、祖母がひとり、孫娘がひとり、兩親は死んだ後で、不殘、深川へ引取り、親父が世話をしたが、おれが、なんにも知らずに、遊んでばかり居た。

此年に、たこにて、前町と大けんくわをして、先は二三十人ばかり、おれはひとりで、たたき合、打合せしが、ついはかなはず、干かばの石の上には、おいあげられて、ながさをで、したたか、たたかれて、ちらしがみになつたが、なきながら、脇差を拔て、きりちらし、諸せん、かなはなく思たから、腹をきらんと思ひ、はだをぬひで、石の上にすはつたら、其脇に居た白子やと云、米屋がとめて内へおくつて呉た。夫よりしては、近所の小供が、みんな、おれが、てしたになつたよ。おれが七ツの時だ。

深川のやしきも、たび〳〵の、つなみ故、本所へ、やしき替を、おやぢがして、普請のできるまで、駿河臺の太田姫稲荷の向ふ、若林の屋敷を、當分かりて居たり。其やしきは廣くつて、庭も大そふにて、隣に五六百坪の原があつたが、ばけ物やしきと、みんなが、はなした。

おれが、八ツ計の時に、親父が、内中のものをよんで、其原に、人の形をこしらへて、百ものがたりをしろ、と、いつた故、夜みんなが、その隣の屋敷へ、ひとりづゝいつて、かのばけものゝ形の袖へ、名を書たふだを、結付て來るのだが、みんなが、こわがつて、おかしかつた。一ばんしまひに、おれが行ばんであつたが、四文錢をみがきて、人の形の顏へ、目にはりつけるのだが、夫が、おれがばんにあたつて、夜の九ツ半くらゐだと思たが、其晩は、まつくらでこまつたが、とふとふ、目を附て來たよ　みんなに、ほめられた。

おれが養家の、ばゝどのは、若い時から、いぢがわるくつて、兩親も、いぢめられて、夫故に若死をしをつたが、おれを、毎日〳〵、いぢめをつたが、おれも、いまいましいから、でほふだいに、あくたいをついたが、その時親父が、聞付ておこつて、おれに云には、年もゆかぬに、ばゝさまにむかつて、をのれのよふな、過言を云やつはない、始終が見屆けないとて、脇差を拔て、おれに打付たが清と云妻は、あやまつてくれたつけ。

翌年、よふ〳〵、本所のふしんが出來て、引越たが、おれがゐる所は、表の方だが、はじめて、ば

ばどのと、一所になつた。そふすると、毎日やかましいことばかり、いひをつたから、おれも、こまつたよ。不斷の食ものも、おれには、まづいもの計くはして、にくいばゝアだと、思て居た。

おれは毎日〳〵、そとへ計り出て遊んで、けんくわばかりして居たが、或時、龜澤町の犬が、おれのかつておゐた犬と、食い合て、大げんくわになつた。そのときは、おれが方は、隣の安西養次郎と云、十四計のが、かしらで、近所の、黒部金太郎、同兼吉、篠木大次郎、青木七五三之助と、高濱彦三郎に、おれが弟の鐵朔と云ふと、八人にて、おれの門の前で、や郎たちと、たゝき合をした。

龜澤町は、絲町の子供をたのんで、四五十人計だが、竹槍を以て來た。こちらは六尺棒、木刀しなゐにて、まくり合しが、とふ〳〵町のやつらを追かへした。二度めには、向ふには、おとなが、まじつて、又〳〵たゝき合しが、おれが方がまけて、八人ながら、隣の瀧川の門の内へはいり、息をついたが、町方では、勝にのつて、門を丸太にてたゝきおる故、また〳〵八人が、一生けん命になつてこんどは、なまくら脇差を拔て、門を開けて、不殘切り立しが、其のいきおひにおそれ、大勢が、にげおつた。

こちらは、勝にのつて切立しも、おれが弟は、七ツ計だが、つよかつた。一番におつかけたが、前町の仕立屋のがきに、辨治と云やつが、引返しきて、弟の手を、竹やりにて、つきおつた。其時おれがかけ付て、辨治の、みけんを切たが、辨治めが、しりもちをつき、どぶのなかへ、おちおつた故、つゞけうちに、つらを切てやつた。前町より、小供の親父らが、出てくるやら、大さわぎさ。夫から八人が、勝どきを揚て引返し、瀧川の内へはいり、互ひによろこんだ。そのさわぎを、親父が、長屋の窓より見て居て、おこつて、おれは三十日計り、目通止られ、おしこめにあつた弟は、藏の中へ、五六日おしこめられた。

九ツの時、養家の親類に、鈴木清兵衛と云、御細工所頭を勤める仁、柔術の先生にて、一橋殿田安殿始、諸大名大勢、弟子を以て居る先生が、横網町と云所に居る故、弟子になりにゆくべしと、親父が云故、いつたが、三八五十の稽古日にて、はじめて稽古場へ出て見た。始は遠慮をしたから、段々いたづらを仕出し、うち弟子にくまれ、不斷ゐらきめにあつた。或日稽古に行と、ばんの木馬場と云所にて、前町の小供、其おやどもが、大勢あつまつて、おれが通るを、まつて居る。一向にしらずして、其前を通りしが、夫男谷のいたづら子がきた、ぶちころせと、のゝしりおつて、竹鎗ぼうちぎりにて、とり卷しが、直に刀を拔く、ふりはらひ〳〵、馬場の土手へかけ上り、御竹藏の二間計りのぬま堀へはいり、漸々にげ込しが、其時羽織はかまなどが、泥だらけになりおつた。

夫から御竹藏番の門番は、ふだん遊びに行故に、いろいろ世話をしてくれたが、内へかへる氣がひがある故、たのんでおくつて貰た。四五十人ばかり、まち伏をしおつた、大まなめにあつた。その後は二月ばかり、龜澤町は、とほらなんだが、同町の縫はくやの長と云やつが、門の前を通りおつたか

ら、なまくら脇差にて、たゝきちらしてやつたが、内の中間が、漸々とめて、辰の内へ、つれていつて、はんの木馬場のしかへしのよしを、そのや郎のおやに、よくいつたとさ。夫よりは龜澤町にて、おれに無禮をするものは、なくなつたよ。

柔術のけいこ場で、みんなが、おれをにくがつて、寒げいこの夜、つぶしと云事をする日、師匠からゆるしがでて、出席の者が、食いものを、てん〳〵にもち寄てくふが、をれも重箱へ、まんぢうを、いれていつたが、夜の九ツ時分になると、稽古をやすみ、皆々持參のものを出してくふが、おれも、うまいものを、くつてやらふと思つて居ると、みんなが寄つて、おれを帶にてしばつて、天上へくゝしあげおつた。其下で不殘寄おつて、おれがまんぢうまで、くひおる故、上よりしたゝか、おれが小便をしてやつたが、取ちらした食ものへ、小便がはねおつた故、不殘捨てしまひおつたが、その時は、いゝきびだとおもつたよ。

十の年、夏馬の稽古をば、しはじめたが、先生は深川菊川町兩番を勤る、一色幾次郎と云師匠だが、馬場は伊豫殿橋の六千右とる、神保磯三郎と云人の屋敷で、稽古をするのだ。おれは馬がすきだから、毎日〳〵門前乘をしたが、二月めに遠乘にいつたら、道で先生に逢て、こまつた故、横町へにげこんだ。そふすると先生が、次の稽古にいつたら、こゞとをいひおつた。まだくらも、すはらぬくせに、いらいは、かたく遠乘はよせ、といひおつた故、大久保勘次郎と云先生へいつて、せめ馬の弟

子入したが、この師匠は、いゝ先生で、毎日木馬に乘れとて、よくいろ〳〵、をしへて吳たよ。

毎日五十くら乘をすべしとて、借馬引にそふいつて、藤助、傳藏、市五郎と云やつの馬をかり、毎日〳〵、馬にばかり、かゝつていたが、しまひには馬を買て、藤助にあづけておいたが、火事には不斷出た。一度馬喰町の火事の時、馬にて火事場へ乘込しが、今井帶刀と云御使番にとがめられて、いつさんに、にげたが、本所の津輕の前まで、おつかけおつた。馬が足が達者故、とふ〳〵、にげおふせた。あとで聞ば、火事場は三町手前よりは、火元へ、行ものではない、といふ事だよ。

壹度、すみだ川へ乘行しが、其時は、傳藏といふ借馬引の馬を、かり乘たが、土手にて一さんに、おひちらしたが、どこのはづみか、力皮がきれて、あぶみを片つぽ、川へおとした。其まゝ、かたあぶみで、歸たことがある。

十一の年、駿河臺に鵜殿甚左衞門と云、劍術の先生がある。御簾中樣の御用人を勤む。忠也流一刀流にて、銘人とて、友達が咄しをつた故、門弟になつたが、木刀の形ばかり、をしへをるゆへ、いゝことにおもつて、せいを出しいたが、左右とかいふ、傳受を吳たよ。其稽古場へ、おれが頭の石川右近將監のむすこが、いでしが、おれの高や何かを、能しつている故、大勢の中で、おれが高はいくらだ、四十俵では小給者だとつて、笑ひをるが不斷のこと故、おれも頭の息子故、内輪にしておいたが、いろ〳〵、ばかにしおる故、或とき木刀にて、思ふさまたゝきちらし、あくたいをついて、なかして

やつた。師匠に、ひどくしかられた。今は石川太郎右衛門とて、御徒頭を勤てゐるが、古狸にて、今になんにもならぬ、女を見たやうな、馬鹿野郎だ。

十二の年、兄きが世話をして、學問をはじめたが、林大學頭の所へ、連れ行やつたが、夫より聖堂のき宿部や、保木已之吉と、佐野郡衛門と云、きもいりの所へいつて、大學をしへて貰たが、學問はきらひ故、毎日〳〵、さくらの馬場へ、垣根をくぐりていつて、馬ばかり乘つてゐた。大學五六枚も覺しや、兩人より斷わりし故、うれしかつた。

馬にばかり乘りし故、しまいには錢がなくつて、こまつたから、おふくろの小遣、又はたわいの金をぬすんで、つかつた。

兄きが御代官を勤たが、信州へ五ヶ年、つめきりをしたが、三ヶ年目に、御機嫌窺に、江戸へ出たが、そのとき、おれが馬にばかり、かかつてゐて、錢金をつかふ故、馬の稽古をやめろとて、先生へ、斷の手紙をやつた。其上にて、おれをひどくしかつて、禁足をしろと、いひおつた。夫から當分、内にゐたが、こまつたよ。

十三の年の秋、兄が信州へかへつたから、又々諸方へ出歩行、のらくらしてゐたが、とかく、おれのばゝあどのが、やかましくて、おれがつらさへ見ると、こゞとを、いひおる故、おれもこまつて、しまひには、兄よめに咄して、智惠をかりたが、兄よめも氣の毒におもつて、親父へ、はなして呉た

が、そこで或日、親父が、ばゝあどのへ、いふには、小吉もだんだん、年もとる故、小身者は、にたきまで、自身に出來ぬと、身上をば、もてぬものだから、以來は小吉が食物などは、當人へ自身にするやうに、さつしやるがよい、といつて、呉た故、猶々おれが事は、かまはず、毎日〳〵自身に、にやまをしたが、醬油には、水をいれておくやら、さま〴〵の事をするから、心もちがわるくつて、ならなかつた。よそより、くわし、何にても貰へば、おれには、かくして呉ずして、おれがきものは、一ッこしらへて呉ると、世間中へ、ふひちようして、わるく計、いひちらし、きもがいれて、ならなかつた。親父にいふと、おれ計しかるし、こんな、こまつた事はなかつた。

十四の年、おれが思うには、男は何をしても、一生くはれるから、上方あたりへ、かけおちをして、一生ゐやうとおもつて、五月の廿八日に、もゝ引をはきて、内を出たが、世間の中は、一向しらず、かねも七八兩、ぬすみ出して、腹に卷付て、先品川まで、道をきゝ〳〵して來たが、なんだか、心ぼそかつた。夫から、むやみに歩行て、其日は藤澤へとまつたが、翌日早く起て宿を出たが、どふしたら、よからふと、ふら〳〵ゆくと、町人の二人連の男が、跡から來て、おれに、どこへ行と聞から、あてはないが、上方へゆく、といつたら、わしも上方まで行くから、一所にゆけと、いひおつた故、おれも力を得て、一所にいつて、小田原へとまつた。

其時、あしたは御關所だが、手形はもつてゐるかといふ故、そんな物はしらぬといつたら、錢を二

百文だせ、手形は宿で貰てやるといふから、そいつがいふ通りにして、關所も越たが、油斷はしなかつたが、濱松へ留た時は、二人が道に、よく世話して呉たから、少し心がゆるんで、はだかで寢たが、其晩に、きものも大小も、腹にくゝしつけた金も、みむなとられた。朝目がさめた故、枕元を見たら、なんにもないから、きもがつぶれた。

宿屋の亭主に聞たら、二人は尾張の津島祭りに、間に合ないがら、先へゆくから、後よりこひ、といつて、立をつたといふから、おれも、とほふにくれて、なゐて居たら、亭主がいふには、夫は道中のごまのはいといふ物だ、わたしは、江戸からの御連と、おもつたが、何にしろ、きのどくなことだ、どこを志して、ゆかしやるとて、しんじつに、世話をしてくれたが、いふには、どこといふ、あてはないが、上方へゆくのだ、といつたら、何にしろ、じゆばん計にては、しかたがない、どしたらよからうと、十方にくれたが、亭主が飛しやく一本くれて、是まで江戸子が、此海道にては、まゝ、そんな事があるから、おまへも此ひしやくをもつて、濱松の御城下在とも、一文ヅゝ貰てこい、と、おしへたから、漸々思ひ直して、一日、方々貰て歩行たが、米や麥や、五升ばかりに、錢百二三十文、貰つて歸つた。

亭主いゝものにて、其ばんは、とめてくれた。翌日、先伊勢へ行て、身の上を、祈りてくるがよかろう、といふ故、貰た米と麥とを三升計に、錢五十文ほど、亭主に禮心にやつて、夫から毎日〳〵、

こじきをして、伊勢大神宮へ參つたが、夜は松原又川原、或は辻堂へ寢たが、蚊にせめられて、ろくに、ねることも出來ず、つまらぬさまだつけ。

伊勢の相生の坂にて、同じこじきに、心易くなり、そいつがいふには、龍太夫といふ、おしの處へいつて、江戸品川宿の青物や大阪やの内より、ぬけ參りに來たが、かくのしだい故、留てくれろ、といふがいゝ、そうすると、向ふで張面をくりてみて、とめると、をしへて呉た故、龍太夫の内へいつて、中の口にて、其の通り、いつたら、はかま抔きたやつが出て、張面を持て來て、くり返し〳〵見をつて、奥へ通れといふから、こは〳〵通つたら、六疊敷へ、おれをいれて、少し立て、其男が來て、湯へはいれ、といふから、久しぶりにて、風呂へはいつた。あがると麁末だが御ぜんをくへとて、色〻うまいものを出したが、これも久敷、くはないから、腹いつぱい、やらかした。少し過て、龍太夫は、かり衣にて、來おつた。能こそ御參詣なされたとて、明日は御ふだを上ませう、といふ故、おれはたゞ、はい〳〵といつて、じきばかりしてゐた。夫から夜具、蚊やなど出して、お休みなされといふから、寢たが、心もちがよかつた。翌日は又々馳走をして、御禮に呉た。

そこで、おれが思ふには、とてものことに、金も借てやらふと、世話人へ、そのことをいつたが、先の取つぎをした男が、出て來て、御用でござりますが、といふから、道中にてごまのはゐのことをいひ出して、路銀を二兩計、かして呉るやう賴む、といつたら、龍太夫へ申聞すとて、ひつこんだ。

少し間だが過て、おれにいふには、太夫方も、御らんの通り、大勢さまの御逗留故、なか〳〵手廻りまさぬ故、あまり輕少だが、是を御持參被下やうとて、一貫文吳た。夫を貰つて、早々にげ出した。夫から方々へ參つたが、錢はあるし、うまいものを、食ひとふしたから、元のもくあみになつた。

龍太夫を敎へて吳た男は、江戸神田黑門町の、村田と云紙屋の息子だ。夫からこゝで貰ひ、あそこで貰ひ、とふ〳〵空に、駿河の府中迄歸つた。なにをいふにも、じゆばん壹枚、帶はなわをしめ、わらじを、いつにも、はひたこともねへから、ざまのわるいこじきさ。府中の宿の眞中ごろに、くわんおんか何かの、堂があつたが、每晩、夜は、その堂の椽の下へ寢た。

或日府中の城の脇の、御紋付を門のとびらにつけた寺があるが、其寺の門の脇は、竹やぶ計の所だが、その脇に馬場の入口に、石がたんとつんで道からそこへ、一夜ねたが、翌日朝早く、侍が十四五人來て、借馬のけいこをしてゐたが、どいつも〳〵、へただが、むちうになつて、乘てをるから、おれが目を覺して、おきあがつたら、馬引どもが見おつて、爰に、こじきが寢ておつた、ふてい奴だ、なぜ、かこひの內へ、へゑりおつたとて、さん〴〵しかりおつたが、いろ〳〵わびごとして、其內へかゞんで居て、馬乘を見たが、あんまり、へたがおほいから、笑つたら、馬喰共が三四人で、したゝか、おれを、ぶちのめして、外へ引づり出しおつた。

おれがいふには、みんな、へたゞから、へたゞといつたが、わるいかと、大聲でどなつたらば、四

十計の侍が出おつて、これこじき、手前はどこの奴だ、子藏のくせに、侍の馬乘を、さつきから、いろ〳〵といふ、國はどこだ、いへ〳〵と云から、おれが國は江戸だ、それに元から、こじきではない、といつたら、馬はすきか、といふ故、すきだといつたら、ひとくらのれ、といひおる故、じゆばん壹枚で、乘て見せたら、みんないひをるには、この小藏めは、侍の子だらふといひおつて、せんの四十計の男が、おれの內へ一所にこひ、めしをやらふ、といふから、けいこをしまひ、歸るとき、其侍の後についていつたら、町奉行屋敷の横丁の、かぶき門の屋敷へはいり、おれをよんで、臺所の上りだしで、したゝか飯と汁を、ふるまつたが、うまかつた。其侍も奥の方で、飯をくつて仕舞つて、又臺所へ出てきて、おれの名又親の名を、きゝおるから、いゝかげんに、うそをいつたらなんにしろ不便だから、おれが所へいろとて、單物を吳た。

そこの女房も、おれがかみを、結て吳た。行水をつかへとて、湯をくんでくれるやら、いろ〳〵とかあいがつた。今かんがへると、與力とおもふよ。其侍は肩衣をかけて、どこへいつたか、夕方、內へ歸つた。夜もおれを居間へよんで、いろ〳〵身の上の事を聞たから、町人の子だといつて、かくしていたら、いまに大小と袴を、こしらへてやるから、爰にてしんぼうしろ、といひおる。六七日もいたが、子のやうにして吳た。

おれが腹の內で思ふには、こんな內に、しんぼうしてゐても、なんにもならぬから、上方へゆきて

公家の侍にも、なるほふがよからふと思ひて、或ばん單物帶もたゝんで、寢所におひて、じゆばんをきて、其内をにげ出して、安部川の向ふの地藏堂に、其晩んは寢た。翌日、夜のあけないうちに起て、むやみに、上方のほふへ、にげたが、錢はなし食物はなし、三日計は、ひどくこまつたが、夫から一文づゝ貰つて、宇都宮の地藏堂に、ふた晩寢たが、其夜五ツ時分に、堂の椽がはに、どんと音がする故、其音に、ゆめがさめたが、人がゐる樣子故、せきばらひをしたら、其人が、そこに寢て居るはなんだ、といひおるから、伊勢參りだといつたら、おれは此先の宿へ、ばくちにゆくが、此錢を手前かつひでゆけ、御伊勢さまへ、おさいせんを上るから、といひおるゆゑ、起出て其錢を、かつひでゆくと、たしか、まり子の入口かと思つた、普請子屋へ、はいりしが、おれもつゞひて入しが、三十人計、車座になりおつて、おれを見て、其こじきめは、なぜ爰へ這入たと、親方らしい者がいふと、連の人がいふに、こいつは伊勢參りだから、おれが連て來たといふと、そんなら手前は、めしでもくつて、まつてろ、今に御伊勢樣へ、御初穗を上るからとて、飯酒を澤山ふるまつた。

少し過ると、連てきた人が、錢を三百文計、紙にまひてくれた。外のものも、五十百廿四文十二文てん〳〵に呉たが、九百計、貰た。みんなが、いひ居るには、はやく地藏さまへいつてねろといふ故禮をいふて、この子屋を出ると、ひとりが、よびとめて、大きなむすびを三ツ呉た。うれしくつて、又半道計の所をもどつて、地藏へ、さいせん上てねたが、夫よりぶらぶら壹文づゝ貰ひ、四日市までゆくと、先頃、龍太夫を、をしへた男に逢た。其時の禮をいつて、百文計、禮にやつたらば、其男がうれしがつて、久敷飯を、はら一ぱい、くわぬから、飯をくはふとて、二人で飯を買て、松原にねころんで食た。別れてより樂に、いろいろのめに逢た咄しをして、其日は一所に、松原に寢たり、こじきの交りは、別なものだ。

夫から二人いひ合て、又々伊勢へいつた。其男は四國の金比羅へ參るとて、山田にて別れ、おれは伊勢に十日計、ふらふらしてゐたり、段々四日市の方へ歸つて來たが、白子の松原へ寢たばんに、頭痛强くして、ねつが出て、くるしみしが、翌日には何に事もしらずして、松原に寢てゐたが、二日ばかり立て、漸く人こゝろが出て、往來の人に、壹文づゝ貰ひ、そこに倒れて、七日ばかり、水を呑でよう〳〵腹をこやしゐたが、其脇に半町計り引こんだ寺があつたが、そこの坊主が見付て、毎日〳〵麥のかゆを呉た故、やう〳〵力がついた。二十二三日計、松原に寢てゐたが、坊主が、こも貳枚呉て壹枚は下へしき、壹枚は夜かけて寢ろ、といつた故、其通にして、ぶらぶらして日を送つたが、二十三日めごろか、足が立た故、大きにうれしく、竹きれ杖にして、少しづゝ歩行た。

夫から三日計りして、寺へいつて禮をいつたら、大事にしろとて、坊主の古いかさと、わらぢを呉た故、漸く一日に一里位づゝ歩行きたが、伊勢路では、火でたいた物は一向くはぬ、生米をかじりて歩行たり、病後故に、腹がなをらぬから、又々氣分がわるくつて、處を忘れたが、或河原の土橋の下

に、大きな穴が横にあいて居るから、そこへはゐつて、五六日寢て居た。

或晩若い乞食が貳人來て、おれにいふには、その穴は先月まで、神田の者が寢處にした所だが、どこへか、ゆきをつた故に、おらが毎晩寢る處だ、三四日か稼ぎに出た故、手前にとられてこまる。といふゆへ、病氣のよしをいつたら、そんなら三人にて寢ようとぬかして、六七日一所にゐたが、食ひ物に困り、どふしよふと、二人へいつたら、伊勢にては火の物は、太神宮樣が外へ出すを、きらいだから、くれぬ故、在鄕へいつて見ろ、といふから、杖にすがつて、そこより十七八町の脇の村方へ這入つたら、番太郎が、六尺棒を持て出て、なぜ村へ來た、其爲に入口に札が立てある、このべらぼうめが、とぬかして、棒でぶちをつたが、病氣故に、氣が遠くなつて倒れた。

そうすると足にて、村の外へ飛ばしおつた故、匍匐ばうようにして、漸く橋の下へ歸て來たら、二人が、どふしたといふから、其しだいをいつたら、手前は米はあるからといふから、麥と米と三四合貰ひためたを、だして見せたら、そんならおれが、かゆこを煑てやらうといつて、德利のかけを出して、土手のわきへ穴を掘て、德利へ麥と米と入て、水をも入れ、木の枝をもして、かゆを拵へて吳たから、少しつくた、後は禮に、二人にふるまつた。夫よりおれも、古とく利を見付、毎日毎日、貰た米麥引わりを、其德利にて煑て食たから、こまらないやうになつたが、夫迄は誠に、食物にはこまつた。

だん〳〵氣分がよくなつたから、そろ〳〵と、そこを出かけて、府中まで歸たが、とかく錢がなくつて困るから、七日丁度盆だから、毎夜〳〵、町々を貰て歩行たが、傳馬町と云所の米屋が、ちいさい小皿に、引わりを入て、せぎやうに、見勢へならべて置から、一つとつたが、一つのさしに、錢の壹文あるから、そつと又一つとつた。そうすると、米をついてゐた男が、見付おつて、腹を立て、二度取を、しおるとて、にぎりこぶしで、おれを、したゝか、ぶちおつたが、病後故、道ばたに倒た。やう〳〵氣が付た故、くわんおん堂へ、いつて寢たが、其時は、漸く二本杖であるく時故か、翌日は一日、腰が痛くつて、どこへも出なんだ。

夫から或日の晩かた、飯がくいたいから、二丁町へ、はいつたが、麥や米計吳で、飯をくれぬから段々貰つて行たら、まがり角の女郎やで、客が騷いで居たが、おれにいふには、手前は子藏のくせ、なぜそんなに、二本杖であるく、わるくわずらつたか、といふ。さよふで、ござり升といつたら、そふであらふ、よく死なゝかつた。どれ飯をやらふとて、飯や肴や、いろ〳〵のさゐを、竹の皮につゝませ、錢を三百文つかんで吳た。おれは地ごくで地藏に逢たやうだと思つて、土へ手をつゐて、禮をいつたら、其客が、手前は江戸のやうだが、ほんのこじきでは有まい、どこか侍の子だろふとて、女郎に、いろ〳〵はなしおるが、ひちりめんの袖口の付た、白地のゆかたと、こんちりめんの、ふんどしを吳たが、うれしかつた。

其の晩は木賃宿へ留つて、疊のうえへ寢るがいゝ、といつた故、厚く禮をいつて、夫から傳馬町の横町の木賃宿へ、夜になると留つたが、じまひには、宿せんやら、食物代がたまつて、はらひに、しかたがないから、單物を、六百文のしちに入れて貰て、さう〳〵、そこのうちを立て、殘りの錢をもつて、上方へ又、忘してゆくに、石部までいつて、或日宿のはづれ、茶やの脇に、ねて居たら、九州の秋月と云大名の長持が、二棹きたが、其茶屋へ休んでゐると、長持の親方が二人來て、同じく、せう木に腰をかけて、酒を呑で居たが、おれにいふには、手前は、わづらつたな、どこへゆく、といふから、上方へと行といつたら、あてが有のかといふ、あてはないが行、といつたら、それはよせ、上方はいかぬ所だ。それより江戸へ、かへるがいゝ、おれが、つひていつてやるから、まづ、かみさかゆきをしろとて、向ふの髪結所へ、連ていつてさせて、そのなりでは、外聞がわるいとて、きれいのゆかたを呉て、三尺手拭を呉た。何にしろ杖をつひては、らちがあかぬから、かごへ乘とて、かごをやとひてのせて、毎日〳〵、よく世話をして呉た。

江戸へいつたら、送つてやらふとて、府中まで連て來たが、其晩親方が、ばくちのけんくわで、大さわぎが出來て、おれを連た親方は、國へ歸るとて、呉た單物を取返して、木綿の古じゆばんを呉て直に出て行おつたから、今一人の親方がいふには、手前は是迄、連てきて貰たを、とくにして、あしたは一人で、江戸へ行がいゝとて、錢を五十文計、呉おつたが、しかたがないから、またこじきをし

て、ぶら〳〵來て、所は忘れたが、或がけの所に、其ばんはねたが、どふいふわけか、がけより下へ落た。岩のかどに、きん玉を打たが、氣絶をして居たとみえて、翌日漸々人らしくなつたが、きん玉がいたんで、あるくことがならなんだ。二三日過ると、少しづゝ、よかつたから、そろ〳〵あるきながら、貰ていつたが、箱根へかゝつて、きん玉がはれて、うみが、したゝか出たが、がまんをして、其翌日、二子山まで、あるいたが、日が暮るから、そこに其晩は、寢て居たが、夜の明方、飛脚が三度通りて、おれにいふには、手前ゆふべは、こゝに寢たか、といふ故、あいといつたら、つよひやつだ、よく狼に食れなんだ。こんどから、山へは寢るなといつて、錢を百文計呉た。

夫から三枚橋へきて、茶やの脇に、寢て居たら、人足が五六人來て、子藏や、なぜ寢て居ると、いひおるから、腹がへつてならぬから、寢て居るといつたら、飯を一ぱい呉た。其中に四十位の男が云には、おれの所へ來て、奉公しやれ、飯は澤山くはれるからと云故、一所にいつたら、小田原の城下のはづれの横町にて、獵師町にて喜平次と云男だ。おれを内へいれて、女房や娘に、奉公につれてきたから、かあひがつてやれ、といつた。女房娘も、やれこれといつて、飯をくへといふから、飯をくつたら、きらすめしだ。魚は澤山あつて呉た。一日たつと、あすよりは海へ行て、船をこげといふから、江戸にて海へは、度々いつた故、はい〳〵といつて居たら、子藏の名は、なんといふと聞から、龜と云といつたら、おはちの、ちさいのを渡して、是に辨當をつめて、朝七つより、毎日毎日ゆけ、

手前は江戸子だから、二三日は、海にて飯は食へまいから、もつてゆくなと、喜平がいひおるから、おれは江戸にて、毎日海に、船を乘たから、こはくないといつたら、いや〳〵江戸の海とは違ふ、といふから、それでもきかずに、辨當をもつていつた。

夫から同船のやつが、内へおれを連ていつて、たのんだから、翌日より、早くこひと云、それから毎朝〳〵、船へいつたが、みんなが云には、龜があるくなりは、をかしいといひおる。其はづだ、きん玉のはれが、引ずに居て、水がぽたぽた、たれて困つたが、とう〳〵、かくしとふしてしまつたが、こまつたよ。毎日、朝四ツ時分には、沖より歸つて、船をおかへ三四町引あげ、あみをほして、少しづゝ魚を貰つて、小田原の町へ、賣にいつた。夫から内へかへつて、きらつをかつて來て、四人の飯をたくし、近所のつかひをして、二文三文づゝ貰た。内の娘は三十計たのいゝやつて、時々すゐくわんなどを、買てくれた。女房は、やかましくて、よくこき遣つた。喜平は人足故、内へは夜許り居たが、是はやさしいおやぢで、時にくわしなんぞ、持て來て呉た。

十四五日計居ると、子のやうにしおつた。おれに江戸事を聞て、おらが所の子になれと、いひおる故、そこで考へて見たが、何にしろ、おれも武士だが、内を出て、四ケ月になるに、こんな事をして、一生居ても、つまらねへから、江戸へ歸つて、親父の了簡次第になるがよからふと思ひ、娘へきげんをとり、引ときものゝ、つぎだらけなのを一ツ貰ひて、閏八月の二日、錢三百文、戸棚にあるを

ぬすんで、飯を澤山、辨當へつめて、濱へゆくといつて、夜八ツ時分起て、喜平が内をにげ出して、江戸へ、其日の晩の八ツ頃にきたが、あいにく空はくらし、すゞ森にて犬が出て取まひて、一生けん命、大聲を揚てわめくと、番人こじきが、犬をおひちらして呉た故、高輪の、りやう師町のうらに、はいりて、のり取船があつたから、夫をひくり返して、其下に寢たが、あんまり草臥たせいか、あくる日、目があがつても、寢て居たから、所のものが、三四人出て目付てしかりおつた。わびことをして、そこを出て、飯をくひなどして、あたご山へまで一日寢て居て、其晩は、坂を下るふりをして、山の木のしげみへねた。三日計、人目を忍んで、五日めには、よる兩國橋へきて、翌日、ゑかふ院のはか場へ、かくれて居て、少しづゝ食物かつて、食て居たが、しまひには、錢がなくなつたから、毎晩〳〵、かきねをむぐり出て、貰て居たが、夜は、くれてが少ないから、ひもじい思ひをした。

ゑかふ院奥のはか場に、こじきの頭が有が、おれに仲間にはいれと、ぬかしおつたから、そやつの所へいつて、したゝか、めしを食た。そして夫から、龜澤町へ來て見たが、なんだか、しきゐが高いやうだから、引返して、二ツ目の向ふの、材木問屋のかげへ、いつて寢た。三日めに、朝早く起て、内へかへつたが、内中、小吉が歸つたとつて、大さわぎをし、おれが部屋へはいつて寢たが、十日ばかりは、寢どふしをした。おれが居ない内は、加持祈禱、いろいろとして、從弟女の惠山と云びくは、上方迄、尋て登たとてはなした。

夫から醫者が來て、腰下に何か、しさゐがあらふとて、いろ〳〵いつたが、其ときはまだ、きん玉が、くづれて居たが、强情に、ないといつて、かくしてしまつた。三月ばかりたつと、しつが出來て、段々、大そふになつた。起居もできぬやうになつて、二年計は、そとへもゆかず、內ずまひをしたよ。夫から親父が、おれの頭、石川右近將監に、歸りし由をいつて、いかにも恐入事故、小吉は隱居させ、外に養子致すべきといつたら、石川殿が、今月かへらぬと月切故、家は斷絕するが、まづ〳〵かへつて目出たい、夫には及ばぬ、年取て改心すれば、お役にも立べし、よくよく、手當して遣すべし、といはれた。夫から一同安心したと、みなが咄した。

▲これ迄は、讀み易くするために、振假名と、句讀點を、附けることにしたが、實を云ふと、原形の儘で讀んだ方が、本篇の味ひは、ずッと深いのであつて、殊に、此邊まで讀んで來れば、全文の筆遣ひにも、大體、熟するであらうから、旁々以て、以下は、原形の儘に、掲げることにした。

十六の年には漸くしつも能なつたから出勤するがいゝといふから逢對をつとめたが頭の宅で張面が出て居るに銘々名をかくのだがおれは手前の名がかけなくつてこまつた人に賴んで書て貰た石川が逢對の後で乞食をした咄しをかくさずしろといつたから初めからのことをいつたら能く修業した今に御番

入をさせてやるから心ぼうをしろといはれた

また內ではは〻アどのが猶々やかましくつておのれは勝の家をつぶそうとしたなといろいろいひおつてこまつた故毎日〳〵內には居なんだ兄きの役所詰に久保島可六と云男があつたがそいつがおれをだまかして連て行きおつたがおもしろかつたから毎晩〳〵いつたがかねがなくつて困て居ると信州の御料所から御年貢の金が七千兩來た役所へ預りて改て御金藏へ納るのだ其時おれに番人を兄きがいひつけたから番をして居ると可六が云にはかねがなくては吉原は面白くないから百兩計ぬすめと敎へたがおれも左うだといつて千兩箱をあけて貳百兩とつたが跡ががた〳〵する故こまつたら久保島が石ころを紙につゝんでいれて呉た故しらぬ顏で居たが二三月立としれて兄きがおこつたが色々せんぎをしたらおれが出したと役所の小遣めがはく狀しおつた故おれに金を出せとて兄がせめたがしらぬとて强情をはり通したが兄が親父へ其譯を咄したら親父がいふには手前も年の若いうちは度々そんな事は有たつけわづかの金で小吉をきづものには出來ぬ故なんとか了簡してみやれといつたそこでいよ〳〵おれが取たに違ひない故それきりにしてたれもしらぬ顏でおさまつたおれは其金を吉原へもつていつて壹月半ばかりにつかつてしまつたが夫から藏宿やほうぼうを賴んで金をつかつた

或日おれの從弟の處へいつたら其子の新太郎と忠次郎と云兄弟が有が一日色々咄しをして居たがそこの用人に源兵衛と云が居たが劍術遣ひだと云ことだがおれに云にはお前さまは色々とおあはれなさ

り升がけんくわはなさいましたことが有升か是はきもがなくつてはできませんと云からおれが喧くわは大好だが小さい内から度々したがおもしろいものだといつた左やうで御座升かあさつては藏前の八幡の祭りであり升が一喧嘩やりましやうから一所にいらしやいまして一勝負なさいましといつたから約束をして歸つた

其日になりて夕方より番場の男谷へいつたら先の兄弟も待て居てよく來た今源兵衛が湯へいつたから歸つたら出かけやうと支度をして居ると間もなく源兵衛が歸つた夫より道に手はづをいひ合て八幡へいつたがみんなつまらぬやつ計で相手がなかつたが八幡へはいると向ふよりきいたふうのやつが二三人で鼻歌をうたつて來る故一ばんに忠次郎がそいつへつばを顔へしかけつたが其野郎が腹を立て下駄でぶつてかゝりおつたそふするとおれがにぎりこぶしで横つらなぐつてやると跡のやつらが惣がゝりになつてかゝりおるから目くらなぐりにしたらみんなにげおつたゆえに八幡へいつたつてふらふらして居ると廿人ばかりなかとひを持てきおつたなんだと思つて居ると壹人があのや郎だとぬかして四人を取まきおつた

それから刀をぬひてきりはらつたら源兵衛が云には早く門の外へ出るがいゝ門をしめると取こになると大聲でいふから四人が並て切立て門の外へ出たらそいつらの加勢とみえて又三十人計とび口を持て出おつたから並木の入口のすなばそばの格子を後ろにして五十人計を相手にしてたゝき合たが一生け

ん命になつて四五人ばかりきづを負したら少し先がよはくなつたゆゑむやみにきりちらしとび口を十本程もたゝき落したそふするとまた〳〵加勢がきたがはしごを持て來た其時源兵衛が云には最早かなはぬから三人は吉原へにげろ跡は私がきりはらひ歸るからと早くゆけといつたが三人ながら源兵衛ひとりをおくを不便に思ひ一所におひまくつて一所ににげやうといつたらおまへさん方はけがゝ有てはわるいから是非〳〵早くにげろとひたすら云故おれが源兵衛の刀がみじかいからおれの刀を源兵衛に渡して直に四人が大勢の中へ飛こんだら先のやつはばらばらと少し跡へ引込だはづみにげだして漸々淺草の雷門で三人一所になり吉原へいつたが源兵衛がきづかいたから引もとして番場へいつて飯をくはふと思つていつたら源兵衛は内へ先へ歸つて玄關で酒を呑で居た故三人は安心した

夫から源兵衛と又々一所に八幡の前へいつてみたらばたこ町の自身番へ大勢人が立て居るからそこへいつて聞たら八幡で大喧嘩が有て小揚の者をぶつたが始まりで小あげの者が二三十人藏前のしごと師が三十人で相手をとらへむとしてさはいだかとふとふ一人もおさへずにがした其上にこちらは十八人計手負が出來た今外科がきづを縫て居るといふから四人ながら内へ歸つておれは龜澤町へ歸つたがあんなひどい事はなかつたよ

刀は侍の大切のものだから能くきを付けるものだが刀は關の兼平だが源兵衛へかした時鍔元より三寸上て折た夫から刀のめきゝを稽古した此年兄きと信州へいつたが十一月末には江戸へ歸た源兵衛を師

匠にして喧嘩のけいこを毎日毎日したがしまひには上手になつた暮の十七日淺草市へ例の連にていつたが其の時忠次郎がかたをきられたが衣類をあつくきたゆゑ身へは少しもきづがつかなかつたがき物はじゆばん迄きれた其晩はしらずに寢たが翌朝女がきものをこたつへかけるとて見付て忠次の親父へさういつた故おれも呼によこしたから番場へいつたら忠之丞が三人並て色々いけんをいつて呉た以來は喧嘩をしまいと云書付を取られた此忠之丞と云人は至ていゝ人で親類が聖人のやうだと皆々こわがつた仁だ翌年正月番場へ遊びにいつたら新太郎が忠次郎を庭で劍術を遣つて居たがおれにも遣へと云故忠次と遣つたがひどく出合頭に胴をきられた其時は氣が遠くなつた夫より二三度遣たが一本もぶつ事が出來ぬからくやしかつた夫から忠次に聞て園野へ弟子入にいつた先の師匠からやかましくいつたが構はず置た夫から精を出して早く上手にならふと思つて外のことはかまはず稽古をしたが翌年より傳受も二つ貰た夫からあんまりたゝかれぬやうになつてからは同流の稽古場へ毎日〳〵いつたが大勢が暴つてきて小吉〳〵といふやうになつたまた他流へむやみと遣ひにいつたら其時分はまだけん術が今のやうにはやらぬから師匠が他流試合をやかましくいつた他流は勝負をめつたにはしないから皆へたが多く有た故おのれが十八の年淺草の馬道生政左衛門と云一刀流の師匠が居たが或時新太郎と忠次とおれと三人でいつて試合をいひ入たが早速に承知した故稽古場へゆつて其弟子とおれと遣つたが初めての事故一生けん命になつて遣つたが向ふがへたでおれが勝た夫から段々遣つて師匠と忠次に政左

衛門が體當りをされて後の戸へつき當られて雨戸がはづれてあほのけに倒たが起る處をつゞけて腹を打れた其日は夫きりで仕舞たが始めに師匠が高まんをぬかしたがにくひから歸りにはおれが玄關の名前の札を拔打にして持て歸つた夫から方々へ行あばれた馬喰町の山口宗馬が處へ神尾源津高濱おれ四人でいつて試合をいひこんだら上へ通して宗馬が高慢をぬかした故試合をしやうといつたら今晩は御免被下重てこゐといつた故歸りがけに入口ののれんを高濱が刀て切さゐて奥へほふりこんで歸つた夫から同流の下谷あたり淺草本所共に他流試合をする者はみんなおれが差圖を受たから二尺九寸の刀をさして先生つらをして居たがだん〳〵と井上傳兵衛先生が其頃は門人多くおもだつたやつら皆おれが配下同前になり藤川鳴八郎門人赤石郡司兵衛が弟子園野のはいふに及ばすきり從ひ諸方へ他流に行たが運よくみなかつた他流は中興先づおれがはじめだ

翌年夏だか遠州掛川在の雨の宮大明神の神主中村齊宮の息子が江戸へ國をにげて來て石川瀨兵次といふ劍術遣ひの弟子になつたから諸々をたづねているから其時おれが世話をして弟子にしてやつたら瀨平次が三州吉田へ行時其齊宮方へきて息子の劍術の師何の隼太といふやつと試合をしたが手もなく隼太が石川に負たその時石川がまん心して隼太をもゝへ乘て鎗のすごきをしてみせた故に名人だとおもつて江戸へあとを追てきたといつたが田舍者は馬鹿ものだ其頃は石川先生の中にもへただつた齊宮の息子は帶刀といふたがだん〳〵出精して目錄になつて國へ歸た

十八の年又信州へいつたが其年は兄きかきしよくがわるくつて榊木といふ村の見所場のけん見をおれにさせたが出役して一番惡處の場へ棹を入れて取並の時もみ一升二合五勺あつたから六合五勺の取並を云付たら一同百姓が嬉しがつた此月陣屋元の郡代百姓の所へ上州の仁田萬次郎が近親櫻井某とか云家來がねだりに來てけんくわになり刀を拔て一人百姓をきつた夫よりさわぎになつたが大勢出て召捕とつたが二尺八寸計りの刀を眞向にかざし郡代が門をいるやつをきりおる故役所より手代が二三人出て下知をしたがこわかつた只わめく計りだから兄がおれにいつておさへろといふから一さんに飛んでいつたが門とそやつがいる所と四尺計りではゐる事ができぬから見ていたらゐたかいふは私かとり樣があるといつて六尺棒を一本ぶつけたが其者が二ッにきつた刀を上る所へつけこんで組付たがこしたからもゝへかゝりて切れた其時おれが砂をつかんでは面に打つけたが目に入てしかうつぶせに伏たから先刻のゐたがきんをとつて引すへた夫より二三人ゐたが打かさなつてしばつたそれから陣屋のろうへ入たあとは上州の仁田と懸合になつたきられたゐたは榊木の者だが七人扶持公儀より一生貰たかたはにはなつたかつよゐやつらだつけ

夫からけん見に諸々へいつた其内江戸でおふくろが死だとしらせてきたから御用を仕まつて江戸へ來る道で信州の追分で夕方五分月代の野郎が馬方のかけにはゐいて下にいたが兄が見付ておれにとれといふからかこの脇から十手をぬいてかけ出したら其野郎は一さんに朝間の山の方へにげおつたからと

ふとふおつかけて近寄たら二尺九寸の一本脇差をそりかへして御役人樣御見のがし被下ませといつたからうぬなに見のがす物だとそばへゆくと其刀を拔おつたが引廻しをきて居たが其すそへ小戻が引かりて一尺計拔おつたがおれが直にとびこんで柄を持て中がへりをしたら野郎も一所にころんでおれの上になつたが後から平賀村の喜藤次といふ取締が來て野郎の頭をもつて引くりかへした故おれも起上りて十手にてつゝきちらした夫からなはを打て追分の旅宿へ引來た上田小諸より追々代官郡奉行が出てきて野郎を貰に來たいつたいこいつは小諸のろふに二百日計居たが或晩ろうぬけをして追分宿へきて女郎やへ金をねだり壹兩とつて歸る道だといつた音吉とて子分が百人も有ばくち打だと役人がはなした夫から大名へ渡すと首がないから中の條の陣やへやつた其後そいつの刀を兄が呉たが池田鬼神丸國重と云刀だつけ二尺九寸五分あつたおれが差料にした夫からすゐ峠で小諸の家老の若い者が休足所へきて無禮をしたから鹽澤圓藏と云手代とおれとその野郎をとらへて向ふの家老のかこへぶつけてやつた上州の安中でも所の劍術遣だといつたか常藏と云中間の足を白鞘を拔てふいにきりにかゝつたから其時もおれと二人で打のめしてしばつてやつた宿役人に引渡して聞たら酒亂だといつた十一月初めに江戸へ歸つた夫からまた〳〵他流へあるきさわひだが本所の割下水に近藤彌之助と云劍術の師匠が居たが夫が内弟子に小林隼太と云奴があつたが大のあばれ者で本所ではみんながこはがつた或とき小林が智惠をかつて津輕の家中に小野兼吉と云あばれ者がおれの所へ他流をいひこんだ其時は内に居た

故呼入て兼吉へ逢たが中西忠兵衛が弟子で其はなしをして居ると兼めが大そうな事計ぬかし手前の刀をみせて長ゐのを高まんをいひをるから聞て居たら十萬石の内にてこの位の刀をさす者がない私計だといふから刀を取て見たら相州物にて二尺九寸そこでおれのさし料を見せたが平山先生より貰た三尺二寸の刀故兼吉め大きにひるみをつたからつけこんで高まんをいひ返してやつた夫から試合をしやうといつたらなんと思つたか今日は御免とぬかしをる故日限を約束して兼吉の所へ行つもりにして下谷連へいつてやつたら四五十人計集た故兼吉方へ手紙を持せてやつたらたゞ今屋敷へ來るとて返事はよこさず待て居たら近藤の弟子の小林めが肩衣なんどき居つておれの所へ來て色々あつかひを入て兼吉にわひをさせるから了簡しろと云故急度念をしたら此後兼吉がおまへ様をかれ是いつたら私が首を獻しますと云からゆるしてやつた故本所はたいがいおれの宇になつた

此年芝の片山前に居る湯が向ふ町へ轉宅をすることにて仲間もめがして山内の坊主が町奉行の榊原へ頼んでやるといつて金貳十兩とつたが元よりうそ故に其湯屋がほんとうにして右の趣を奉行所へ願出にして出したら奉行所でいふには湯屋は樽屋三右衛門の懸りだから差越願だとて取上ぬ故大きにこまつた中野清次郎といふ者がおれに頼だから幸ひおれが從弟の女が樽やへよめにいつて居るから其親父の正阿彌といふものは心易いから頼んでやらふといつたら悦び其の坊主を連て來たからおれが正阿彌の所へいつて譯をだん〳〵咄して夫より樽やへいつてやつたら樽やが承知して奉行所より願出を下て

惣方利がいをいつて聞して其湯やが向ふへ引越たが嬉しがつた其禮に樽やへ三十兩正阿彌へ二十兩おれに四十兩呉た其からは酒井左衛門の用人のめかけがもつて居るといひをつた湯やは向ふへ音請をすると八十兩かぶが高くなると清次郎がはなした

此年又々越後蒲原郡水原の陣屋へいつた六萬八千巡見したが面白かつた越後には支配所の内には大百姓が居る故いろ〳〵珍らしき物も見た反物金をもたんと貰てかへつた夫から江戸へ歸たが近藤彌之助の内弟子小林隼太が男谷の方へ替流してりきんだがあはれ者故にみんながこはがつて居るから相弟子ともを馬鹿にしをる故におれにも咄があつた故隼太めを目に物見せんと思て居たが久敷風を引て癒て居るから夫れなりにしておいた或日少し氣分がいいから寒稽古に出たら小林も來て居て勝様一本願たいとぬかすから見る通り久しく不快が今に月代もそらす居る位だがせつ角の事だから一ぽん遣ひましやうといつて遣つたが先二本つゞけて勝たら小林が組付たから腰車に掛てなげてやるとあふのけにたをれたから腹を足にておさへてのどをついてやつた其時小林が起上り面をとつておれにいひをるには侍を土足にかけて濟かすまぬかとぬかすから是は貴公の言葉にも似ぬいひ事かな最初の立相にみしゆく故差圖をして呉ろと御申故侍の組打は勝とかやうの物だと仕形をして見せたのだいひぶんはあるまいといつたら御尤一言もござりませぬといひをつたから夫からおれをやみ打にするとて付をつたが時時油斷を見ては夜道にてすつぱ拔をして切をつたが時々羽織なぞ少づゝきつたがきづはつけられた事

はなかつた夫からいろ〳〵しをつたがおれも氣を付て居た故に或時暮に親類に金をかりにいつた時に道の横町より小林が酒をくらつた勢ひでおれが通るといきなりではなの先へ刀を拔てつき出た畫だから往來の人も見て居る故其時おれがわざと懐手をして居て白畫になまくらを拔てどふするといつたら小林が此刀を買ましたが切れるか切れぬか見て呉ろといふから能みて骨位はきれるだろふといつたら鞘へ納めて別れた人が大勢立留て見て居た古今のめつぽうけい者だ

十八の年に身代を持て兄の庭の内へ普請をして引移た其時兄から借金三百兩計の證文と家作代を家見に呉た親父よりは家さいの道具を一通り貰たから無借になつて嬉しかつた夫からいろ〳〵の居候者が多く來おつたから幾らもおいたら借金か出來たよ

十九の年正月稽古始に男谷の稽古て東間陳助と平川右金吉と大喧嘩をして互に刀を持てけいこ場へ出てさわいたか其時もおれが引分てやう〳〵和睦させた

此年より諸方の劍術遣ひを大勢子分のやうにして諸國へ出したがみんなおれが弟子だといつてあるく故名が廣くなつて來た夫から本所中のい丶頭をして居るのらくら者を不殘たいじしてみんながおれか差圖にしたかつた故こはゐ者はなくなつたが夫には金もいるしつき合がはつたからたいそう借金が出來た

又他流試合を商賣のやうにして毎晩喧嘩にみんなを連て歩行た或とき平山孝藏と云先生へもいつてい

つも〳〵和漢の英雄の咄しを聞てはみんなをしこなして居た夫から色々馬鹿計して居たから身上がわるくなつて來て借金がふへる計仕方がないから出來ないそうだんにむやみに借金をして居たが廿一の年には一文もなくなつてしやうがなかつたからさし料の刀は終や久米右衛門といふ道具やより買た盛光の刀四十一兩て買た故夫を賣かと思つたが夫もをしいからよしたが逢對に行にもきたまゝになつたから氣休めに吉原へ行た親か呉た刀やら色々質に置て相弟子へも金をかり色々し漸々三兩二分計出來たを持て其の晩は吉原へいつて翌日車坂の井上の稽古場へ行劍術の道具を一組かりて直に東海道へかけ出した其日はむこくに歩行て藤澤へ泊て朝七ッ前に立て小田原へ行て先年世話になつて居た内に喜平次を尋て行たが喜平次もこじきが侍にばけて來たものだから始めはふしんした喜平の内を出た龜だといつたら漸く思ひ出していろ〳〵酒などふるまつたが三百文ぬすんだ事をいひ出して金を二分二朱やつた外に酒代を二朱出して以前船へ一所に乘た野郎共を呼て酒を呑して今は劍術遣ひになつたことを咄して笑つたらみんながきもをつふして居た今晩はぜひとも泊れといつたが江戸より追手がくるだらふと思たから早々別れてそこを立て箱根へかゝつた喜平次と外三人計三枚橋まで送てきたがそこより返して漸々關所へかゝつたが手形がないから關所の椽がはへいつて劍術修行に出し由申て御關所を通して被下といつたら手形を見せろといふからそこでおれがいふには御覽の通り江戸を歩行通りのなり故手形は心つかすけいこ先より不計思ひつひて上方へ修行にのぼり候雪踏をはき候まゝたび支度も致

さず參りし事故相なるべくは御通被下候樣にといつたら番頭らしきがいふには御大法にて手形なき者は通さずしかし御手前の仰の如く御修業とあれば無餘義故御通し可申以來は御心得可被成といつた故かたじけないとて夫から關所をこして休んで居たら後よりきた商人がいひをるには今私が御關所を通りましたがおまへさまの噂をしてこさつたが今通つた侍は飛脚でもないがはん中でもなしなんだらふとて噂をして居ましたといふから其筈たはおれは殿樣だからといつてやつた山中で日が暮てから宿引めが泊れとてぬかしたがとふ〳〵がまんで三島までいつたら四里が間五月二十九日の日だからまくらがりでなんぎしたせつたをぬいで腰をはさみ漸々夜の九ツ時分みしまへ來て宿へかゝつて戸をたゝき泊て呉ろといつたら當宿はにら山樣から御ふれでひとり旅は泊ぬといふから問屋場へ寄ておこして宿をたのんだらそいつがいひをるには問屋が公儀の御觸れはやぶらぬ差圖はできぬときめるままそこでおれがいふには海道筋みしま宿にては水戸のはりまの守が家來はとめぬかおれは御用の義が有り遠州雨の宮へ御きかんの便に行くのだがしかたがないから是より引返して道中奉行へ屋敷より掛合ふ故夫迄は御用物は問屋へ預け參から大切にしろとて稽古道義を障子ごしになげこんだそふすると役人共がきもをつぶし起て出をつて土に手を付をつてはりま樣とは不存不調法恐入たとて色々あやまるから圖に乘て荷物はあづけるから急度受取をよこせといつたら困りをつて外に二三人も出てはいつくばりいかやうも致しますからまづ〳〵宿屋へいつて少しの內休足して呉れろといふ柄漸々案內といつたら脇

本陣へ上げをつて段々不調法の譯をわびをり飯を出したから猶々やかましくいつたら役人が重て當宿の宿役人が不殘しくじるから何分にも勘辨しろと云から腹がいた故ゆるしてやつたそふすると酒肴を出して馳走しをつた其時書付をよこせといつたら夫に因つて夫も出すまいといつた故又々引くり返してやつたら金を一兩二分出して又々あやまりをつた故金が思ひよらすとれる故濟してやつた其內に夜が明かゝつたから寢ずに三島を立たら道中かごを出したから先の宿迄寢て行た其筈だ稽古道具へ箱根を越し水戸と云ふ小札を書てさして置いたものだからうまくいつたのだおれが思ふには是からは日本國を步行て何ぞあつたら切死をしやうと覺悟して出たからなにもこはいことはなかつた夫からだんだん行て大井川が九十六文川になつたから問屋へ寄て水戸の急ぎの御用だから早く通せといつたら早々人足が出て大切だはりま樣だとかぬかして一人前はらつておれはれん臺でこし荷物は人足が越たが水かみに四人並んで水をよけて通したが心持がよかつた夫から遠州の掛川の宿へ行たが昔帶刀を世話をしたと思ひ出したから問屋へ行て雨の森の神主中村齋宮迄水府の御祈願の事で行からかごを出せといふと直にかごを出して呉たから乘て森の町といふ秋葉海道のしゆくへ行た宿でかご人足に聞たら旦那は水戸の御使で中村さまへゆかしやると云たら一人かけだして行きをつたが程なく中むら親子が迎ひに出てきたからおれがかごから顏を出したら帶刀がきもをつぶしてどふしてきたといひをるから內へ行てくはしく咄そふとて帶刀の座敷へ通りて齋宮へも逢たが江戸にて帶刀が世話になつたことを厚禮

くをいひ居る夫から江戸の樣子をはなして思ひだしたから逢ひにきたといつたら親子が悅でまづ〳〵ゆふ〳〵と逗留しろとて座敷を一間明て不自由なく世話をして呉たから近所の劍術遣ひへ遣ひに行やら色々すきなことをして遊んで居たが其内弟子が四五人出來て毎日〳〵けいこをして居たが所詮こゝに長く居てもつまらぬ故上方へゆかふと思つたら長州萩のはん中に城一家馬と云修行者が來たから試合をして家馬が諸々歩行た所を書寫して居る内家馬が不快で六七日逗留をしたいと云から泊つて居る内はたゝれすいろいろと支度をしたら齋宮は或晩色々異見をいつて呉て江戸へ歸れといふから最早けつして江戸へはかへられず此度で二度まで内を出た故夫は忝ないが聞ぬといつたらそんなら今暑いさかりだから七月末までゐろといふ故世話にもなつたからふりきられも出來ぬから向ふのいふ通にしたら悅で猶々しんせつにして呉た毎日〳〵外村の若者がきてけいこをしてその後では方々へ呼れていつたがきものは出來金も少しは出來て日々入用のものは通ひ帳が弟子よりよこしてあるから只買て遣ふしこまることもなくそこより七里脇に向坂といふ所にさき坂淺二郎と云が居るが江戸車坂井上傳兵衛の門人故江戸にてけいこもしてやつた者故そこへ度々行て泊て居たが所の代官故に工面もいゝからおれがことはいろ〳〵して呉夫故にうかうかとして七月三日迄帶刀の内に逗留して居たが或日江戸より石川瀨兵衛が吉田へくる序に今日こゝへよるといふから座敷のそうじをして居たらおれが甥の新太郎が迎ひに來をつたから夫からしかたなしに逢たらおまへの迎ひに外の者をやつたら切ちらして歸るまいと相談の上わたしが來たから是非とも江戸へ歸るにした翌日齋宮方を立て段々歸るうち三島の宿で甥が氣絶して大さはぎをやつたが氣が付て夫から通し駕籠で江戸へ歸つたが親父も兄もなんにもいはぬ故少し安心して内へいつたよく日兄が呼によこしたからいつたらいろ〳〵馳走をした夕方親父が隱宅から呼に來たからいつたら親父がいふにはおのれは度々不埒が有から先當分はひつ足して始終の身の思案をしろしよせん直には了簡は付く物ではないから一兩年考て見て身のをさまりをするがいゝ兎角仁は學問がなくてはならぬからよく本でも見るがいゝといふから内へ歸つたら座敷へ三疊のをりを拵て置ておれをぶちこんだそれから色々工夫をして一月もたゝぬ内をりの桂を二本ぬけるやうにして置たが能々考た所がみんなおれがわるいから起たことだと氣がついたからをりの中で手習を始て夫から色々軍書本も毎日みた友達が尋て來るからをりのそばへ呼で世間の事を聞て賴しんで居たら二十一の秋から二十四の冬迄をりの中へはいつて居たが苦しかつた其内親父より度々書取にしていけんをいつて呉た其時隱居をして息子が三ツになるから家督をやりたいといつたらそれは惡い了簡だ是まで種々の不埒があつたから一度は御奉公でもして世間の人口をもふさぎ養家へも孝養をもして其上にてすきにしろと親父がいつてよこしたから尤のことだと初めて氣が付た故出勤がしたいと兄へいつたら手前が手段で勤道具衣服も出來るなら勝手にしろおれはいかひ事手前にはいり上た故今度は構はぬといつた故其時はおれがほふの下にはれ物が出て居て寢て居たが少も苦勞をかけまいと云書付を出してを

りを出で翌日拜領屋敷へ行て家主へ談して金子二十兩かり出して色々入用のものを殘らず拵て十日めに出勤した夫から毎日〳〵上下をきて諸々のけんかを賴んであるいたが其時頭が大久保上野介といひしが赤坂喰違外だが毎日毎日行て御番入をせめたそれから以前よりいろ〳〵わるいことをした事を不殘書取て只今は改心したから見出して吳ろといつたら取扱が來て御支配よりおんみつをもつて世間を聞糺から其心得にて居ろといふから待て居たら頭が或時いふには配下の者は何事もかくすが御自分は不殘行路を申聞た故所々聞合た所がいはれたよりは事大きいしかし改心して滿足だ是非見立やるべし精勤しろといふから出精してあいにはけいこをして居たが度々書上にもなつたが兎角心願ができぬからくやしかつた

此年親父や兄にいひ立て外宅をして割下水天野右京といつた人の地面をかりて今迄の家を引たが其時居所に困たから天野の二階をかりて居た内に俄に右京が大病にて死んだ故色々と世話をしたが其内普譜も出來新宅へ移り居ると右京方にては跡取が二歳故本家の天野岩藏といふ仁が久來の意趣にて家督願の時六ッかしくいひ出して右京の家をつぶさんとしたからいろ〳〵もめて片付ず其時おれが本家とは心あひから色々なためとふ〳〵家督にさせた故天野の親類が悅で猶々跡のことを賴みをつたから世話をして居る内右京のおふくろが不行跡でやたらに男くるひをしてふだんそうとふして困るから折角普譜をしたが其家を賣て外へこそふと思つて右京の子金次郎が頭向へいひ出したら其取扱がいふには

今おまへにゆかれると跡は亂みやくになるから一兩年居て吳ろといふから居たが人のことはおさめてもおれが内がをさまらぬから困つて居たら或老人がをしへて吳たが世の中は恩を怨で返すが世間人の習ひがおまへは是から怨を恩で返して見ろといつたからだ其通りにしたら追々内も治てやかましいはゝア殿も段々おれを能して吳るし世間の人も用ひて吳るから夫から人の出來ぬ六かしい相談事かけ合其外何事に限らず手前の事のやうに思てしたがしまひにはおれにはむかつた奴らが段々したがつて來てはい〳〵といひ居る是もかの考人がたまものとうれしく同流の劍術遣いがふらち又は遣込してとほふにくれて居る者は夫々少づゝ金を持せて諸方へ遣し身の安全をしてやつたら幾人か數もしれず其後おれが諸國へいつた時いかひ事とくになつた事がある歩行た所でおれが名をしつて居て世話をしたつけ天野が地面に居る内もとかく地主のごけが事でむづかしいこと計かいつてこまつたから三年めに同町の山口鐵五郎が地面へ家作が有から引越たが此鐵五郎が惣領は元より心易かつたがいろ〳〵内をかふつた時に世話をやいてやつた故其はゝア樣が是非地面へこひといふから行た此年勤の外には諸道具の賣買をして内職にしたが始はそんばかりして居る内段々なれて來て金をとつた始は一月半計の内に五六十兩損をしたが毎晩〳〵道具やの市に出たから隨分德が付たなにしろ早く御勤入をしやうと思つた故方々かせいであるひて居た内に男谷の親父がしんだからがつかりとしてなにもいやになつたしかもその中風とかて一日の内死だから其時はおれは眞崎いなりへ出稽古をしてやりに行て居たから内の

小侍が迎ひにきたから一さんにかけて親父の所へいつたが最早ことが切たそれからいろ〳〵世話をして翌日かへつた毎日其事にかゝつて居た息子が五ッの時だ夫から忌命があいたからまた〳〵かせいだ此年十月本所猿江に摩利支天の神主に吉田兵庫と云者があつたが友達が大勢此弟子になつて神道をしたおれにも弟子になれといふから行て心易くなつたら兵庫がいふには勝様は世間を廣くなさるから私の社へ亥の日講といふ拵て被下ませとて頼たから一ヶ月三文三合の加入をする人を拵たか劍術遣ひはいふに及す町人百姓迄いれたら二三ヶ月の中に百五六十人計出來たから名前を持て兵庫にやつたら悦て受取た夫から一年半かゝつたら五六百人になつた全くおれが御陰だから當年は十月亥の日に神前にて十二座井跡でおとりを催して神いさめをしたいて頼むから先づ講中の世話人を三十八人拵へた諸々へ觸て當日參詣をして呉ろといつてやり其日には皆々見聞のためだから世話人は不殘御紋服をきて呉ろといふから其通りにしてやつたら兵庫はしやうそくをきて居た段々參詣も多く初めてこのやうなにきやかな事はないとて前町へはいろ〳〵商人が出て居た夫から講中が段々來ると酒肴で跡で膳を出して振まつてゐると兵庫めがいつか酒に醉てゐるをつて西の久保で百萬石ももつたつもをしをりおれが友達の宮川鐵次郎と云に太平樂をぬかしてこき遣ふ故おれがおこつてやかましくいつたら不法の挨拶をしをるゆゑ中途でおれが友達をみんな連て歸つたそうすると外の者があつかひをいつてあやまるからおれがいふにはひつきようは此講中はおれが骨折故出來たを難有もおもはないとみえて太平樂をぬ

かすはものをしらぬやつだから講中をはぬけるからそふいつて呉ろといつたら大頭伊兵衛橋本庄兵衛最上幾五郎と云友達が尤たが折角出來たのにおまへが斷ると皆々斷るゆえ兵庫今更後悔してあやまるからゆるしてやれと種々いふからそんなら以來は御旗本様へ對し慮外致すまいと云書付を出せといつたらとの様にもさせるからと云故宮川井深津金次郎といふ者と一所に兵庫の所へいつたそうすると大頭伊兵衛が道迄迎にきていふにはおまへが兵庫はかり衣をきて門まで御迎に出るそれから座敷へ出て昨日の不調法をわひさせるから挨拶をしてやれといふから閉屆たといへたゝそれからは講中が不殘出て馳走するから跡では決して右の咄しはして呉るなといふからおれがいふには不殘承知したが外の者へよくよく口留をしなさい若しも昨日の咄しをしたやつが有其時は世話人がうそつきになるから片はしより切て仕舞つもりで來たからよくいひきかして置なさるかいいとていじようをこめて歸した間もなく兵庫が宅へいつたら同人が迎に出るし世話人も不殘玄關迄でたから座敷の正面へ通つたら刀かけにおれが刀をかけて皆々座に付た兵庫も出ておれに昨日は酒興上不禮の段々恐入たり以來つゝしみ可申由平伏していひをるからおれがいふには足は裏たな神主なる故何事もしらぬと見える御旗本へ對して不禮言語同斷故咎めしなり講中漸々廣くならんとする時に最早心におこりを生した故右の如く不禮あり隨分愼て取續く様にとて夫から一同がおれにいろ〳〵機けんを取てもてなしたが酒がきらひ故に人々醉てさはぐをみてゐたら兵庫の甥に大竹源太郎と云仁が有がおれが裏だな神主だといつたを聞を

つて腹を立てきのふのしまつを宮川をだまして聞をり小吉はいらぬ世話をやく宮川のことて伯父に大勢の中ではぢをかゝしをつた是からはおれが相手ださあ小吉出ろといつて其身御紋服をきながらはち巻をして片はたぬきて座敷へ來る故にしらぬ顏して居たら直におれが向へ立てじたばたしをるからおれがいふには大竹は氣が違ふたそふた雜人の喧嘩をみたやうにはち巻とはなんのことだ武士はぶしらしくするがいゝ此方は侍だから中間小者のやうなことはきらひだといつたらふとひやつだとて吸物せんを打付たからおれがそばの刀を取て立上り契約を違へてたわことをぬかすは兵庫が行屆かざるからだ甥が手向ふからは云合たにちがひないからのぞみ通り相手になつてやらふとていつたら大竹がくそを喰へとぬかしたから大竹より先へつきはなして吳やうと思ひおつかけたらみんながにげ出した夫から兵庫が勝手の方大竹もにげたからおひ行くと折わるく兵庫がなん戸へおれがはいつたら大勢にて杉戸を入ておさへて居から出る事が出きぬ大竹は恐て丸腰でうぬが屋敷の伊豫殿橋まで歸つた夫から大勢が杉戸口へ來て色々いふから許してやつたら大竹と和しゆくして吳といひをるから大竹が不禮の事をとがめたし色々あつかひがはいつて特には大竹がおふくろがないてわびたから伊よ橋へ呼にやつて源太郎が來たから段々酒醉の上恐入たとて殊更相支配ゆゑに何卒御支配へははなしおして吳るなとて和ぼくをしたそれから酒がまた出て大竹が云ふには一ぱいのめといふから酒は一向呑ぬといつたら夫はまだ打とけぬからだとぬかす故盃をやう〳〵取たら吸物わんで呑とみんなが云かんしやくにさはつ

たから吸物わんで一杯呑だら大勢よつて今一ぱいとぬかす夫からつゞけて十三杯呑だ後のやつらは醉ていろ〳〵不作法をしたからおれは其席では少しも間違たことはしなかつた兵庫が駕籠を出したから乘て橋本庄右衞門が林町の内迄來たがそれからは何もしらなかつた内へ歸つても三日ほどはのどがはれて飯がくへなかつた翌日みんなが尋て來て兵庫が内の様子をいろ〳〵はなして其時橋本と深津は後へ殘て居て以來は親類同様にしてくれといふから兩人が起證文を壹通づゝよこした夫から猶々本所中かしたがつたよ兵庫かむねがわるいから講中も斷てやつた其時おれが加入した分は不殘斷た故段々すくなくなつてつぶれたとよ

或時橋本庄右衞門へ妙見歸りがけにいつたら殿村南平と云男が來て居たから近付になつたが其男がいふにはおまへ様は天府の神を御信心と見えますが左様で御座り升かとていふから年來妙見宮を拜すといつたら左様で御座り升御人相の天帝にあらはれてをりますといひをる夫からいろ〳〵咄しをしてゐると奇妙のことを種々咄すから能聞たら南部の眞言をするかと云から面白い人たと思つてゐたら橋本が親類の病人の事を聞たら夫は死靈がたゝるといひをる故其譯を聞たら其死靈の者は男たと云つて年かつこふ其時の死やうまつてつふさに見たやうに云から橋本に聞たら其通りだと云から大きに恐れて弟子になりたいと賴たら隨分法を敎てやらうと挨拶するから内へ連てきて其晩は泊た夫から眞言の事をいろ〳〵敎て先稲荷を拜めとて其法をも敎た病人の加持の法又は摩利支天の鑑通の法修行の術種々

二ヶ月計に不殘敎て呉た夫から此南平はぼろのなり故色々入用をかけ謝禮旁々壹年半計に四五十兩かけた本所でも大勢弟子が出來てしまひにはみろく寺の前の小倉主税と云仁の屋敷へ住でゐた日々病人迷人其外加持祈禱をし御番人の祈禱何やいろ〳〵諸方より賴たがおれが初め見出した故に南平も悦ておれのことはいろいろ骨折をしてくれた

近藤彌之助の内弟子の小林隼太もとふ〳〵おれが家來になつたから毎日〳〵きて色々と奉公をしたが内がない故淺草の入屋にてかなりの家作が有から買つてやつた劍術中間へ賴て稽古場を出してやつた下谷むれがひいきにして呉た故内職には大小の賣買をしてゐたがしまひには金廻りがよくなつて不斷身上の世話をしをつたがわるかしこいやつで中間はみんなが色いろはくらかされた江戸を三度借倒して三州へ行をつたがおれにはいつも咄してにげた又江戸へ出るといつてもおれが手紙を付て仲間中へかりたをしのわけをしてやるとみんなが損をしたことはそれなりにして呉たとふとふ七八十兩のあひせて三州へ行つたが今に歸てこぬ三州てとふか人間になつたと云事だ夫はおれがてふしへいつた時向島の兼が遠州の秋葉へ參詣した時に鳳來寺にて逢たと其時は奇麗のなりて居たとおれのはなしをして二時計休で居て別れたと聞た

或日小倉主税の宅で神田黑川町の仕立屋に逢たがこいつはかげ富の箱やをするやつだがおれが懇意の德山主計といふ仁が至て富を好て南平に富を賴た故に今日は富の日だから寄加持をするとつて主税の

宅へ大勢其むれが寄てきてより加持を始めやうとする時おれがしらずにいつたら大勢揃てゐるから様子を聞たら右の次第を咄す故其席にゐて始終の様子をみたら南平が女を呼で種々禱て護摩をたいてから女の中座に幣そくを持せて神いさめをして少し過ると女が口はしりて今日は六の大目富は何番〳〵がいゝと云ふ故一同が嬉しかつた夫から上けて仕舞から南平へおれがいふには始て見て恐入た併是は隨分出來る事たらふといつたらは仕立やめが直に口を出して勝様が仰ては有か中々ようゐには寄加持は出來ぬ其譯は悉く法が有ると云をるから夫は尤たが能つもつて見ろ南平は何處の馬の骨だが知らないがあの通りするがおれは生れながら御旗本で身分も尊し其おれが一心を誠にして寄たら神は速にのふ受が有ろと思ふ故にいふのた南平に聞におのしか出すきた事をいふとは失禮だとしかつたらは仕立屋が云には夫はあなたが御無理だ神事には法と云物がありますとて色々ぬかす故おれが座敷の眞中へ出て先つ論は無益だから手前は自分の前へ出て禮をしろゆるすといはぬ内に手前の額が上つたらおれは直に手前の飯たきにならふからさあこひといつたら大勢がけんまくをみてとりいろ〳〵挨拶するからは夫はゆるしたがなんにしろ夫れ程出來様と思ふなら直に寄加持をして見ろといふから水を浴して先の女を呼で祈たら南平がした通りいろ〳〵口ばしりをつたから仕舞てから高まんをいつて歸つたが夫からみんなが南平へ賴むと金がいる故おれに計り賴だ德山の妹を一度南平に寄て呉ろと主計が賴だら生靈が付て有から二三日其生靈をはなさなければならぬ故金五兩程かゝるといつたから同人がおれ

に咄す故三晩かゝつて放してやつた夫から南平はおれを恨んで中が悪くなつたかげ富でも九十兩德山と一所にとつた夫より十二十位は幾度も取たことがある

行は色々したが落合の藤いなりへ百日夜々參詣し又は王子のいなりへも百日半田荷へも百日日參した水行は神前に桶を置て百五十日三時ッゝ行をしたしかも多た其間には種々のことが有たがこゝへはもらした斷食も三四度したが出來ぬと云事はないものだ

地主に代官を先代より勤た故役所の跡があいてゐる故に水心子天秀と云刀かちの孫聟に水心子秀世と云男を呼で役所の跡へ入て刀をうつた又研やに本阿彌三郎兵衛と云の弟子に仁吉と云男が研が上手だから呼でおれの住居を分て刀を研しておれも習た夫より刀劍講と云ものゝ事を工夫して相弟子や心易に咄して取立て秀世又は細川主税正義並美濃部大慶直種神田の道賀又は梅山彌曾八小林眞平其時代の刀鑑へ不殘刀劍講を取立てやつたが或日千住へいつて胴をためしたが夫から淺右衛門乃弟子になつて土段切をして遊んだ息子は御殿へ上つてゐるから世話はなかつた息子が七歳の時だ

地主が小高でびんぼう故借金取が來て困るといふから引受て片を付てやつたが夫から地面うちの地借が九軒有たが地代も宿賃もろくろくよこさぬからみんながたゝき出しておれが懇意の者を呼で置たから其後は地代其外かとどこほらぬから悦てやい〳〵いひ居つた地主が或日御代官を願ふから異見をいつてやつたら大きに腹を立て葉山孫三郎と云手代と相談をしておれを地面から追出そふと云たからお

まへは最早五十年におなりなさるから御代官は御止被成といつたらなぜだと云から御代官になるには先始は千兩計いつて夫からいろ〳〵家作も大破だから貳百兩半もいるし皆さんが支度にも百兩として若も支配へ引越でもすると百兩半もかゝる故貳千兩の借金が出來るから其上に元〆かわるいと引責も出來てどの樣に儉約をして勤ても三十年は借金をぬくにかゝる故子孫が迷惑して其勘定が立ぬと遠流又は斷絶になるから決て働きのない者が勤める役ではないといつたら内中がおこつて地面を返して呉ろといひ居から地面中へ觸て不足の地代宿代を不殘集ておれが懐へ入てゐてのき場所を見付るに折悪く脚氣にて久敷煩つてゐた故歩行ことが出來ぬから人に賴て漸々入江町の岡野孫一郎と云相支配の地面へ移たが其時おれは地主へ地返するの禮にいつて御代官になつたら五年は持まいからどふで御心願が成就なすつたらしくしらぬ樣專一に被成まし夫は云事が違たら生ては御めに懸らぬといつたらなぜだと云から葉山の成立を荒增いつて歸たか案の條四年目めに甲州のさわぎでしくじり江戸へいつて小十人組へ組入をしたが三千兩程借金出て家來も六ケ敷大心配をしてお負に葉山は上り屋へいつて三年程かゝつたが氣の毒だからおれが一度尋てやつたらばおまへの異見を聞ぬ故にかふなつたがどふぞ家は助けたい者だといつて涙ぐんだからかあいそふだから段々と葉山が始末を聞て甲州の郡代へやる手紙の下書を書て是を甲州へ遣してこうしろ大方奇德人がたまつてはゐますまい五百やそこらは出すたらふと教へてやつたらきもをつぶした顏をして早々甲州へ屆た其後間もなく六百兩金が出來たから家

を立たが今は三十俵三人扶持だから困つてゐる江戸のかけやにも千五百兩計借が有故三人ぶちはむけきりに成てゐる夫故に小供が月々今におれを尋てくれる夫からとふ〳〵しまいには小普請入りをさせられて百日の閉門で濟んだ其時の同役は井上五郎右衛門はとふ〳〵改易になつた葉山も江戸の構へを喰つたよ

岡野へ引越てから段々脚氣もよくなつてきてから二日めにか息子が九ツの年御殿から下たか本のけいこに三ツ目向の多羅尾七郎三郎が用人の所へやつたが或日稽古に行道にて病犬に出合てきん玉を喰れたが其時は花町の仕事師八五郎と云ふ者が内へ上ていろ〳〵世話をして呉たおれは内に寢てゐたがしらして來たから飛んで八五郎が所へいつた息子は蒲團を積て夫に寄かつてゐたから前をまくつて見たら玉が下りてゐた故幸外科の成田と云が來てゐるから命は助かるかと尋たら六ヶ敷云から先息子をひどくしかつてやつたら夫で氣がしつかりとした様子故にかこて内へ連てきて篠田といふ外科を地主が呼で頼だからきづロを縫たが醫者がふるへてゐるからおれが刀を拔て枕元へ立て置てりきんだから息子が少しもなかなかつた故漸々縫て仕舞たから様子を聞たら命は今晩にも受合は出來ぬといつたから内中のやつはないて計ゐる故思ふさま小言をいつてたゝきちらしてその晩から水をあびて金比羅へ毎晩はたか參りをして祈た始終おれがだいてゐて外の者には手を付はせぬ毎日毎日あばれちらしたらば近所の者が今度岡野様へきた劍術遣ひは子を犬に喰れて氣が違たといひをつた位だがとふ〳〵きづも

直り七十日目に床をはなれた夫から今になんともないから病人は看病がかんじんだよ

親類の牧野長門守が山田奉行より長崎奉行に轉役したが其月水心子秀世かいひ人で莊の門外櫻田町の尾張屋龜吉といふ安藝の小差が牧野の小差に成たがつておれに頼だ故世話をしてやらふといつたら金を五拾兩持てきて是で牧野様が御好の物を買て上て呉ろといふからいろ〳〵牧野の息子へ品物をやつたが一日おそくて外の者がなつたから尾張屋は鼻があいた故氣の毒だから殘の金をは返すといつたら夫は水金でござり升から御遣ひ被成ませとて三十兩計呉た故其後に久せがなつた故世話をしてやらうとおもつて呼にやつたら龜吉は疾に死だといふからそれきりにしたつけ

地主の當主がどふらく者で或時揚代が十七兩たまつて吉原の茶やが頼ふといひをつて困たがふだんだから誰も世話をしない故おれに頼だおれは昨今のことだからしむず金を工面して濟してやつたが其後も五兩に壹分の利の金を七十兩借て女郎を受たが皆濟目錄とかを代りにやつたとて用人や知行の者が困てゐる故に又おれに頼だから諸方の道具やよりきてゐた大小やら道具やらいろ〳〵こんたんをして取かへしてやつたが一ゑん夫を返さぬからおれが困て諸方へ段々と返したが夫から萬事金のゆふづふがわるく成て困た夫につき合がはるから大迷惑をした其當分は色々道具を賣て取つゝいだが段々物がつきるからしまひには武器を拂たが年來たん精をして拵た物故をしかつたが仕方がない故不殘賣たが拵る時の半分にもならないものだしまひには四文の錢にもこまつた全く地主に立替た故だ

夫から或晩地主のおまへさまがしのんできて云には孫一郎がふしだら故に家内中は困るから支配向へ談して隱居させて呉ろと云から取扱へも咄したらおまへ様より證この文を取てこひと云から其事を咄して文を取て長坂三右衛門へみせたら頭の長井五右衛門へ始終を咄して支配から隱居しろと云て出たから孫一郎も何とも云事が出來ずに隱居したが後の孫一郎は十四だからみんなおれが世話をして家督の時も一所に御城へ連て出た先孫一郎は隱居して江雪と改て剃髪した夫から家事の事もみだらになつてゐるから家來に差圖して取締方萬事口入して取極を付てやつたら程なく又々隱居が岩瀨權右衛門と云男を用人に入ていろいろ悪法をかいて權右衛門へ給金貳拾兩に貳拾俵五人扶持やつて好の事をしをるから内中が寄て頼故に頭沙汰にして權右衛門を追出して外の用人を入た其内に後の孫一郎のおふくろが死ぬ故隱居が又々色々もくろみをしたから其時も其一件を片付てやるし其後江雪が女郎を引受連て來た時も世話をして柳島へ別宅を拵へてやつた夫から一年ばかり立て江雪が大病故に色々世話をしたが其時におれにいふには今度は快氣はおぼつかないから悴の事は萬端頼からよめをとらして後御番入する迄は必見捨ずに世話をしてくれといふから聞屆たと挨拶をしたら悦で翌日死だから又々世話をして殘りなく後を片付たが世間で岡野と云と誰もよめの呉てがないから麻布市兵衛町の伊藤權之助が娘を貰てやつたおまへさまが云には何も持てきてがないから何にもいらぬと云から權之助へおれが掛合て百兩の持參で諸道具も高相應にして貰たから知行所の百姓もきもをつぶして私共二三年諸方へ頼

で奥様の事を骨を折たが岡野と聞と皆々破談になりましたが御蔭で殿様初一同安心して悦ます殊には御持參金も有し有難といひをつた夫迄は千五百石で道具が一つなくつて大小迄も逢對の度にかりて出る位だから世間で呉ないも尤だと思た夫から普講が大破故武州相州の百姓を呼出して五六日色々理解をいつて聞して四百兩出して家作も直し大勢の厄介の身上迄拵てやつた當主の伯父の坊主でゐた仙之助と云男にも地面内へ家作をして妾迄持してやつたら家内の者がおれを神さまのやうにいひをつた暮し方も二百兩ゆゑ三百三十兩の暮しにして厄介へは夫々壹ヶ年あてがひを付て稽古事でも出來る様にして馬迄かはし千五百石の高位には少し過る位にしてやつたが何をいふにも借金が五千兩計ある故持こらへが馬鹿の者には出來ぬ

おれは次第にびんぼうになるし仕方がないから妙見宮へむりの願をかけて今一度困窮の直るやうにと百日の行を初めたが一日に三度づゝ水行をして食をすくなくして祈たが八九十日立と下谷の友達が寄て久敷おれが下谷邊へこないとてなぜだらふと云とおれの家來分の小林隼太が此頃はびんぼうになつてよわつてゐるといつたらみんなが氣の毒な事だ今迄色々世話にもなるし恩返しには少しでも無盡をして掛捨にしてやらふかそふいつては取ぬから勝を會主にするがいゝとて相談して鈴木新二郎と云井上の弟子の免許の仁が來ておれに云には今度友達が寄て遊山無盡を拵るが最早大がいは拵たがおまへに會主をして呉ろといふから成て呉ろといふゆゑにそれはよかろふが此節は困窮して中々無盡どころ

ではないから斷て呉といつたら何にしろおまへが斷ると出來ぬから加入しろと云掛金も出來ぬといつたら夫でもいゝからといふ故承知したとて歸たら二三日立てまた新次郎がきて帳面を出して金五兩置て此後は加入の人々が來るといつて歸た故全く妙見の利益と思て夫から直に刀の賣買をしたら其月の末には築地の又兵衛と云藏宿の番當が頼だ備前の助包の刀を松平伯耆守へ賣て十一兩もうけたが又兵衛もうなき代とて別に五兩呉た夫から毎晩江戸神田邊本所の道具市へ出てはもうけすることがよかつたから段々金が出來る故に諸々のこん意の者が困ると聞くと助けてやつた故みんながひいきをして色々刀を持て來るから素人より買からいつも損をした事はなかつた道具の市にてはもうけの半分は諸道具やへそは又酒を買て喰たゆゑ殿様〳〵といひをつて外の者がかふを物を持てくると前廣に內通してくれる故いつも損をしなかつたから伏の市には切者のものにおれがかさをあけさせたから見損して三匁の物をおれが壹分にも入るとかせあけが段々見て勝様は三匁五分と云から五分のそんだからよかつた其替りにはいつも仕舞にはそばをたとへ五十人來て一ぱいッゝにても是非くはせる様にして歸したから町人は壹文貳文をあらそふ故みんなが悅て諸々の市場にはおれが乘るふとんを一ッゝ拵てあつた友達がくやしがつていつもおまへは市では商人がはいはい云かとふいふ譯だと云から右の次第を咄したら夫ではそんだと皆々いつたが大そふとくになつた夫から借金が四十俵の高で三百五十兩半あるから女郎を買たと思つて金の入度々段々とうちこんだら二年半許りに三四十兩になつたこはいも

のだ

何でもほどこしが專一と心得て近所は勿論困ると云物には夫ぞれ其者が身に應じてほどこしたが其せいかきゝんの年には毎日〳〵日々壹朱づゝ小遣にして遊んだ友達へも時の間を合してやるし毎晩〳〵道具の市へ行を勤めたと思て精を出した賣物のブ市といふ物を百文に付て四文づゝのけて見たが三月の中に三兩貳分と葉錢がたまつたから刀をこしらへた

劍術の仲間では諸先生をのけていつもおれが皆の上座をしたが藤川近義先生の年廻には出席が五百八十半人有たが其時はおれが一本勝負源平の行司をした赤石孚祐先生の年忘は岡野でしたが行司取締はおれだ井上の先傳兵衛先生の年忘にも頼で諸勝負の見分はおれがした男谷の稽古場開にもおれが取締行司だ其時分は萬事流義のもめ合相弟子口論傳受の時の言渡多分おれ計したが岡野は傳受の事は皆々おれに聞合たおれが下知にそむく者はなかつた大小の拵様并衣服又は髪形まで下谷本所はおれの通りにしたが奇妙の事だとおもつて居るよ

其時分は諸々の道場が至て義定が立てゐて先生とは同座同席は弟子がしなかつた外がの先生來ると直に高弟が出向ひて刀を取て案內をした先生達も其玄關迄迎ひに出たものだが此頃は物が亂てしらぬ顏でかまはぬがいろいろの様子になる物だ稽古も稽古場へ二組と極てゐたがそれもむちやになつて幾組も勝負をする様になつた

通り町のちゝぶや三九郎と云者が公義のきぢかた小遣ものゝ御用たしだが段々家がおとろへてきて今は其かぶが外にも出來て一向に御用もたさずして困てゐると高田藤五郎と云者がいふから段々聞たら此節末姫樣が藝州へ御引移り故右の御用がきゝたいと云故にこれが骨を折て御本丸の御年寄の瀨山さんを賴で末樣の御引移りの時の師匠番くれなゐさんへ賴で御用きゝにしてやつたが其前に心願が出來たら紅井さんへ三十兩瀨山さんも禮をする約束故に其事をいつてやつたら紅さんは大の欲ばり故悦でちゝぶ屋へ貫札を渡して先七十兩の御用を申渡た故右の金をよこせと云ふから三九郎へ咄たらいろいろなんじゆうをいひをつて始とは違ておれの內へもこぬゆゑ三九郎を呼で世話のへんかへをしたそふすると最早御用も下るし貫札を取上はしまゐと思てゐると二三日立と貫札を取上られて御用の物は不用になつたからおれの所へかけ付て夫婦できたいろいろいひをつたが始末がかん氣にさはつた故夫なりにしてゐたら四十兩計損をして其上に大火事に燒て裏店へはゐつていると聞いた世の中には三九郎の樣な者が今はいくらもあるから油斷をするとくらふ者だおれが二番目の兄が御代官になつてから先生三郎右門へ八兩貸したを返さぬから男谷て出合て大喧嘩をして兄は其晩にげて歸つたが夫から十年計り絶交して居たが何とか思つたと見へておれの所へ手紙をよこして久々逢ぬから近所へ來たから尋て呉ろといつて金を二分よこしたから龜澤町へいつて兄よめに話したならば先から尋ねたら行かよいといふから直にいつたら家內出ていろいろと馳走をして彼是といふから久敷無沙汰の段をいろ〳〵云

て仲直り同樣にして歸たら又々兄が女房より文をよこしておれの妻へ禮をいつてよこした夫から不斷尋ねてやつた丁度支配が大兄の支配した越後水原になつたから國の風俗人氣の事を聞からおれが元いつた時の樣子をはなして勤向の事も荒々しかつた事は咄してやつた其翌年の春正月七日御用始の夜に何者ともしらずろふせき者がはいつて惣領忠藏を切殺したが其時早速に使をよこした故とんでいつたが最早事がきれた翌日心當りが有たから小石川へいつたが立退たと見えてしれぬから歸た其內大兄并近親共が來て相談しておれに當分林丁に居て呉ろと云から每晩〳〵泊て居た晝は用が有から內へ歸つてゐて其月の廿五日にけんしがきて廿九日には忠藏の妻と兄が妻と忠藏の惣領の胤太郎を評定所へ呼出しになつておれと黑部篤三郎と云兄か三男か同道人になつて出たが夫から其事で一年の內月に二度位づゝ評定所へ出た或時同所御座敷にて大草能登守が與力神上八太郎と云者と大談事をしたが同所留守居の神尾藤右衞門御徒目付石坂淸三郎評定所同心湯場宗十郎等が中へいりて段々八太郎が不禮の段をわびるから大草へもいはずに歸た凡壹時計りのこと御座敷中が大そふとふしたがいゝきびだつた相士の者は皆々ふるへて居をつた

此年次の兄が始て越後へ行故に留守を預た夫からおれが借金もぬけたから少しづゝ遊山を始めたが仕舞にはいろいろ馬鹿をやつて金を遣つたから困たしかし借金はしないやうにした林町の兄が歸たから留守の內の事を書付で出してやつたら悅て居た

此年從弟の竹内平右衛門が娘をおれの實娘にして六合忠五郎と云三百俵の男へよめにやつた忠五郎は元より弟子故緣者になつた竹内の惣領三平が此年御番入をしかたくるしくつて出勤ができぬから御斷を申して引と云からおれがいろいろ工夫して翌日登城させたら大御番になつた其親父が悅て一生此恩は忘れぬといつたか後年いろ〳〵おれをほめをつた

此暮に松坂三郎右衛門が越後へ行故三男の正之助と云を氣つかふ故におれか異見をして供に連て行けといつたら聞濟て連て行つもりになつたら正之助へ供先の事をいろ〳〵と教へて御代官の侍は支配へ行と金になるから其心得を能含てやつたが嬉しかつたかの地より歸ると禮をするといふから其約束て別たか檢見中心得の事も有から夫を手紙に書て送たかとふして取落したか兄かひろつて江戸へ持て歸て大兄へみせていろ〳〵おれを惡くいつたら大兄か立腹しておれを呼によこした龜澤町へいつたら兄か云にはおのしはなせに正之助へ智惠をつけて色々支配所の事を教た不埒の男た其上に羅紗羽織きてゐるがなせそんなにおこりをるとしかるからおれが云には正之助へ書狀をやりし覺はなく羅紗の羽織は小高故にみなりか惡いとゆうづうが出來ぬ故無餘義きてをり升といつたら其外にも聞た事の有は此頃はもつはら吉原はいりをするよし世間にてはおぬしが年頃にはみんなやめる時分に不屆の致方だと色々云から御尤にはこさり升が是もやはり身上の爲につき合に參りますと云と猶々いかつて何事もおれに向て口答をする親類がおれが云事を誰もいひ返す者はないにおのし壹人計及向ふは不埒た今一言

いつてみろ手は見せぬと脇差の柄へ手を掛て云からおれか云には夫は兄ても御言葉か過ませう私も上の御人た犬も朋輩鷹も朋輩たからそふは切れ升まいとておれも脇差を取たらは兄よめか中へはいつていろ〳〵いつておれをつれて手前の部屋へきて正之助の一件を片付ろと云から直に林町へ行て兄に逢て兄弟の情か薄とて强談したが兄か云には全く貴樣の爲を思つて大兄にいつたとて情をはるから其時は役所の壹番尤〻太郎次を兄の側へ呼寄て兄か家事不取締故に是迄度々結構の御役になるとしくじりし事から當事の御役の事をも勸める氣量かないと云事の荒增をいひ聞て御役を引かい〻といつてやつたそふすると夫はとふ云譯たと云から其時に兄か兄弟の手跡の眞僞を見分さる事が出來ぬ故は中々縣令は大役故に勸められぬといつてなげ出した故おれが取て燭臺を出たせて三度くり返して大音に讀で兄へ返して能にせましたといつたら兄が云にはなんと是ても彼是いふかと云からおれが云にはそこか三郎右衛門は分らぬと云者だなんと私か書た物なら讀內にけん語かすみはしますまい大勢を取扱ふ者が此位の事に心か付すば大なる御役は出來ますまい親類共か每度私をは不勤故に小馬鹿に致しますか天下の評定所で筋違の不禮をたゝす者は是迄聞ませぬ眞だ僞をしらぬ兄を持たか私か不肖で御座り升と拶拶したらは其座の者が一言もいふ事が出來ぬ故兄かいふには是は僞筆に違ひないからわしがあやまつたと云から左やうなら大兄へ手紙を遣して其譯を御申被成と云々其序で又通した故返事のくるまで待て居て申分ないと云大兄が返事を見てから內へ歸たが其時鋼めらは脇差をさして次の間に不殘結

で居たから歸り掛に甥らに向ておのしらは先達中のろふせきの時其通りの心掛をしてたら忠藏はやみ〳〵と殺はしまいもの其時はにげて伯父を取廻た馬鹿にも程の有ものだが親父樣の子供への御敎にかんしんしたといつて笑たが內中がくやしかつたと其後聞たよ

夫から後は大兄も林町の兄もおれが事を氣を付て居るから少しもとんちやくしないでいろ〳〵馬鹿さわぎをして日を送たが或時に林町の兄か三男の正之助が來て色々兄の咄しをしたから揚代滯にして六兩かねを出してかり宅へ林町の用人を連ていつて方をかひてやつたら兄がおこつてやかましくいふから兄よめへおれがいつて色々はくらかして其事は濟だおれも三四年は大きに心がゆるんだから吉原へばかりはいつて居たがとふ〳〵地廻りの惡輩共を手下に付たから壹人もおれに刄をむかふ者なかつた其替りに金もいかい事遣つたが皆なおれがはたらきで借金をせぬ樣にして道具の市へは一晩でもかゝさぬやうにしてまふけたがたりなかつた此年男谷から呼によこしたから精一郎が部屋へいつたらそれから姉が云には左衞門太郎殿おまへはなぜにそんなに心得違計りしなさるお兄樣が此間から世間の樣子を不殘聞合てござつたが捨置ぬとて心配して今度庭へをりを拵ておまへを入ると云なさるから色々みんなが留たが少しも聞ずして昨日出來上たからは晩に呼にやつておし籠ると相談が極たが精一郎も留たが中々聞入がないからわたしもこまつて居るといつておれに庭へ出て見ろと云ふから出てみたら二重かこひにして嚴重に拵た故姉に云は段々兄弟が御深切は難有うございますが今度はとふしんても

おこしらへ被成ばいゝになぜと云には私も今度はいると最早出すと免しても出はしませぬ其譯は此節は先本所で男立のやうになつてきまして世間も廣し私を知らぬ者は人が馬鹿にする樣になりましたからこの如くになると最早世の中へは面が出す事は出來ませぬから斷食して一日も早く死ますケ樣たらふと思た故に妻へも跡の事を能々いひ含てきました思召次第になりましやう精一郎さん大小を渡しますといつて渡したら姉が此上は改心しろと云からおれが此上改心は出來ませぬ氣が違はせぬといつたら精一が御尤だが御身の上を愼めと云から愼み樣もない最早親父が死だから賴みもないから心願も疾より止めた故せめてしたい程の事をして死ふと思た故に兄へ世話を掛て氣の毒だから今より直に爰に居りましやうとて居たが精一郎がいふには必ずおまへには食を斷て死ぬだらふと思た故種々親父が機嫌を見合て留たが聞入ぬ故かふなつたとて案事て吳るからなんでも兄の心のやすまるが肝要だからをりへはいるがおれはよからふと思た先達てから友達がうす〳〵內通もして吳た故疾より覺悟をして居たから一向に驚かぬといつたら何にしろ先づ一度宅へお歸り被成て妻とも相談しろと云から夫には及す先にいふ通り何も內の事は氣にかゝる事はない息子は十六だからおれは隱居をして早く死たかましだ長いきすると息子がこまるから息子の事は何分賴むといつたら其內に姉が來て一先內へ歸れといふから夫から內へもどつたら夜五ッ時分迄呼にくるかと待て居たが一向沙汰がないから其晩は吉原へいつた翌日かへつた

夫から兄へ只は濟ぬから書付を出せと云から夫もしなかつた姉が色々心配をして諸寺諸山へ祈禱など頼んだと云事を聞たから翌年春挨拶安心の爲隱居したが三十七の年だ夫からはむごくに世の中をかけ廻りていろ〳〵の世話をして金を取て小遣ひにしたかまたたりなかつた故色々工夫をしておれの身の上がこふなつたは誰が大兄へ進めてつめろうへまで入やうとしたがとて夫をさぐつたら林町の兄が先年のはちしめた意趣はらしに内中が寄てない事迄大兄へ告たといふことを慥に聞留たから其又返しに目をみせて呉様と思つて居ると三男の正之助がほふと者故に兄が困て居ると聞ながら正之助を呼でたまして聞たら不殘兄が謀ことを白狀したから工面をしては正之助へ金をかして遣はしたが仕舞には兄が借金が藏宿のも切しといふからおれが竹内の隱居をたましてとふ〳〵兄の判を拵へさせて藏宿で百七十五兩勸めと入用が急に林町にて出來たとて正之助竹内諏訪龍藏と云男を頼んで遣つて借たか藏屋でも三人が道具箱で肩衣迄きていつた故うたくらすによこした其金をみんな遣つて仕舞たが二月計で知て兄がりんしよく故に大そふにおこつたからとふ〳〵どこ迄も知らぬ顏でしまつたが藏宿ではいろいろせんさくをしたがしれずにしまつた

或日諏訪部が來て常盤橋にてあさつて狐ばくちが有からおれに一所にいつて呉ろと是は千兩ばくち故に勝と大金かはいるから壹人では歸りが氣遣ひだからと云からおれは其道には今まで手を出したことがないからいやだといつたら只いつて食物でも食て寢て居ろと云からいつたが其時は諏訪部にも元手

が三兩しかなかつたそれもおれが十兩計は貸た故に深川へいつて見たら藏宿の亭主たの大商人が日本橋近邊より集つて五六十人計して場を始めたがおれにはいろいろの馳走をしてくれた故ときは町の女郎やへいつて女郎を呼で遊んで居たが夜の七ツ時分に迎をよこしたから茶屋へいつて見たら諏訪部は六百兩程勝た故おれが見切て連て歸た生れて初めてこんなばくちをみたと云たら皆が先生は人がいゝといつてわらつたよ

夫から思ひ付て心易者へ高利を借たかよかつた淺草の奥山の茶屋へ金をかしたが是はまだるかつたかその代り山中ははい〳〵といひおつた故親分のやうだつけ

或日息子が柔術の相弟子に島田虎之助と云男が有たが當時でのけん術遣ひだとみんながおそれる故この男がかん積の强氣者で男谷の弟子も皆々たゝき伏られて淺草の新堀へ道場を出して居たがおれは一度も逢たことがないから近付にいつたら其時におれが思ふには九州者の二三年先に江戸に來たといつてもまた江戸なれば仕舞から一ッたましいをぬかしてやらふと心付たからひぢりめんのじゆばんにしやれた衣類をきて短か羽織でひやうし木の木刀を一本さして逢にいつたらは内弟子が出てどこからきたといひをる故に勝の隱居だからといつたら早速に虎が出て袴をはいて座敷へ通し始ての挨拶も濟でからいろ〳〵悴が世話の段を述て世間劍術咄しをして居たがおれのなりをやたらにみていろ〳〵な世上のゆうたのゝことをもつてあて付るやうに聞ゆるから兼て其咄しも聞て居た故に一向かまはず其

日の七ツ時分になつたから虎へ云には今日は始て參つたから何そ土產にても持てと致たが御好な物もしれぬ故に手ぶらで參たが酒は如何といつたらば呑ぬと云から甘物はと聞たら夫はいゝと答るからさやうなら御苦勞ながら一所に淺草邊迄御出と斷るをむりに引出して淺草で先奥山の女ともをなぶつて歩行たらきもをつぶした顏をして跡からくるからすし飯をくうかと聞たら好たと云故にそんなら面白所てすしを上るといつて吉原へいつて大門をはいりにかゝると御免と〳〵云からむりに仲の町のお龜すしへはいつて二階へ上ると間もなくいひ付たすしを出した故くつて居る其の時にたばこはといふだと聞たら呑か修業中故にやめて居ると云から夫から夫は小量の事だ烟草をすふとも修行の出來ぬ事は有まい世間ではおまへを豪傑だと云から附近にきた其樣な小量では江戸の修行は出來ぬといつたら左やうなら今日はすはふと云故に下へいひ付て烟草入きせるをかはした又酒も呑めとせめたら同斷の挨拶故夫も呑ました其内に日が入た故諸方へてうちんかとほるし折節櫻時故に風景も一入よく段々と揚やの太夫が道中するから二階より見せたら虎の云には誠に別世界だとて餘念なくみて居たから是からはおれが威勢をみせよふとてすみからすみ迄見せてりきんで見せたが大きに恐れた樣子だから直に佐野槌やへはいつて女郎の氣量の其内で一番といふを上て遊んだが櫻の時分だから室が大勢で座敷がなかつたがおれの顏で明させて明日歸つたがおれは森下で別れて内へ歸つた其時に吉原であの通りの振舞は出來ぬ物だかとふいふことで顏がうれたらふとみんなに咄したに最早隱居は吉原へいつても大丈

夫だといつた故男谷にても安心したと夫からすることがないから毎日毎日くわん音吉原が遊び所で居たが虎がすゝめで香取かしま參詣をしろと云から四月初に松平内記の家中松浦勘次を供に連て下總から諸々歩行た道に他流へゆきてつかひつゝいつたが先年より居候共を多く出した故夫が德になつて路銀も遣はすに諸々をみてきたてうしにて足が痛んだから勘次を上總房州の方へ約束した所へやつておれはてうしの廣やか舟で江戸へ送つて奥たから寢なから内へ歸つた

夫から毎日〳〵淨るりを聞て淺草邊から下谷邊を歩行て樂しみして居たが六月か五月末かと思つたが九州より虎か兄弟が江戸へきたから毎日〳〵行通ひして世話をして江戸を見せて歩行た虎の兄の金十郎と云男は萬事おれ次第になつた居るから大かひおれの内へ留て居たが或日吉原へにはかを見にいつたばん馬道で喧嘩をして見せたら金十郎はこわかつた金十郎は國ではあばれ者といつたが江戸へきてはつまらぬ男であつた八月末に九州へ歸るから川崎迄送つて別れた

此前年地主の孫一郎が身上が段々わるくなつた其譯はおれが奥方を世話をして貰た時は知行所へ談して百姓のまかなひにした故何も困る事はなかつたが追々當主が酒をはじめて段々と取締もみたらになつて奥へ町人が直に入酒の相手をするやうになり伯父の仙之助が色々當主をだまして品をも大かひかりて遊びにかけるし親類の倉橋が惡法をしてかりたをし仕舞には近所の米やの娘を呼こんで毎晩亂酒するからたちまち元の通りになつてきた故仙之助がすゝめて大川丈助と云まかなひ用人を入た知行所

の者は不承知故におれに賴でとめてくれろといふししうとの權之助も賴から色々と異見をしたあげくの果はおれを地立をしやうとしたからけんくわをして遣てあやまらして濟した丈助めが仙之助へとりこんで金五兩かした故とふ〳〵丈助を用人にしたが段々世話をして地主を御番入をさせるとつ云て三十兩かすめた夫から色々立替の金がとつてきて一同こまると又々仙之助が法をして丈助を出しにかゝると丈助が仕揚勘定したら壹年はかりの内に立替金が三百三十九兩になつた其張面を貳冊こしらへて一冊は手前の控にして一冊は旦那へ出したが其拂方の始末が出來ぬから丈助へなんを付て追出そふとすると丈助はりこうだから或晩孫一郎が酒に醉て居を時を窺て旦那の手元へ出した張面盗で燒てしまつた故旦那の方には證こがないからつけかけとも何とも云事が出來ぬ故大に困ていろ〳〵と評議はしたが仕方がないからくうの掛合となつて壹月計立と親類が見兼て色々世話をしたが片が付ぬ故に本家の岡野出羽守が咄て家來をよこして丈助と掛合たが是も證こがないから埒か明ぬ故曾我又右衛門と云伯父が又々掛合たが同じ事で目はなかあかぬ故丈助が御老中の太田備後守殿へ駕籠訴をした故六ケ敷なつて丈助は孫一郎へ引渡しになつて頭の遠山安藝守より通達が有故丈助を受て長家へ押込で宅番を付た家來が少ないから急に雇ひ侍を二三人して村方よりも大勢呼出してさわいだ夫からまい日親類中が寄て丈助へ談したが丈助は書物も能よみて辯舌もよく公邊もあかるくして大丈夫の者だから少も屈せず誰も手になるものがないから番頭から相番の御張縣りをよこして掛合たが皆々云込られて歸るか

ら持あつかつた内又々丈助が御駕籠訴をした故に前の通り遠山より孫一郎へ受取せて嚴番をして居ると今度は女房が又太田殿へかけ込た故是も同しく引取て玄關の次の間へ宅番がてきたがまことに大そうどふにて其の上に孫一郎が身上がわるいから日々の入用がなゐから百姓らがまごつきて金をかりにばかりかかつて居た又頭から御張番のかゝりが替て外のものがきたが是も丈助にやり込られて幾度も來る度に丈助が遊びものになりにくるやうだとてみんなが笑つた夫から又々女房がぬけ出して太田殿へかけこんだ故引取て番人をふやすやら評議やら大こんざつで居ると丈助が惣領が外に勤て居たが是が又御同所へ願て出たから夫を引取中の口へ宅番が出來て三ケ所の宅番故に加入はいるし始末は出來ず大こんざつになつたが仕舞には組頭も病氣引にして頭の遠山安藝守も備後守殿も家來が丈助の悴を引渡時にその使者へ云には岡野孫一郎が家來壹人の事に御番頭も御勤被成安藝守殿が其位のさばきに日數を送るといふは御役目にも御似合不被成事と主人も薄々申たといつたから直に病氣とて翌日より引籠たが外組の本多日向守が引受たが御張衆も入替り入替りして掛合たが片付かす親類もあくねはて居る柄おれが友達が云にはおまへが地面に居な柄何れ程の事をたゝ見てゐるとはどふいふ譯だと聞から夫にはしさゐの有先年より取續の出來ぬ身をおれが骨を折て食やうにしてやつたに丈助をかゝへるなといつたらおれを地立をしやうとしたから喧嘩をした夫からは少しも構はぬ故此度の事も一向にしらぬ顏で居るといつて毎日〳〵上義太夫ふしを聞あるくかいん居したなくさみ故勝手にしをるがい

いから小普請をさせてのかれよふとしたら丈助の悴が出奔した故又々大事になつて御老中方より引渡し者が出奔すると御屈になつて評定所になる故悪くすると家名にもかゝはる事ゆゑ丈助方は悦ふし孫一方は大心配をし直に日向守へ屈たから御張衆が來て大評議をする所へ丈助家内の者へ三度の食事もやらぬ故此日女房より斷乳の屈にて孫一方へ小供三人共差出した故に急に子守や乳母をかゝへるやらすると御張衆も色々な事が一度になつてきたから其席を立てにげて歸つた其時又夜になつて頭から外の御張衆を二人よこして明日は是非〳〵御屈になると云故に親類の者が不殘寄て評議まちまちにて居たが前代見聞の事だと思つたおれは其日には虎之助が來て居て一日内に居たが夕方丈助が宅番所をぬけて出て門を出よふとすると大勢が出て留ると刀を拔てさわいだが其時女房も宅番所を出て外へかけ出すと大勢でおつかけて取おさへなはをかけて連て歸たから丈助が聞て侍の女房へなはをかけた譯を聞かふと孫一の玄關へつめ懸てやかましく云から一同其挨拶が出來ぬ故色々もんちやくするし其時に地主よりおれを呼によこしたから客が有てゆかれぬと斷たら又々親類が是非御出被下とて度々家來をよこすから虎之助は内へ置ていつたら丈助の事を皆々が咄して何卒工夫はないかと頼からおれが云には初よりかよふになると思ふ故丈助を抱入は留たが聞すに入て私を御親類と相談して地立を被成とした故先達中より存しては居ますが御咄もない故しらぬていで居ましたが今となつて御頼でもなか〳〵私には丈助は大敵で掛合はてきませぬから此御相談は御めんとて歸らふとしたらしうとの伊東權之助

が色々譯を云て頼むからそんなら掛合て見ましやうが丈助へ返金の金を御渡し被成といつたらは夫は當のないと云からそんな空談は私には出來ぬとて内へかへつたが虎が云には先生は今迄人の事は色々助てやつた故今度は岡野の諸親類又は頭迄が懸りて出來ず明日の表向になるといふ大變のそふどふを捨て見ては是迄の義々はみないたづらになるから此一件も押付てやるがいゝと云から隱居のいらざる事だといつたら夫はそうと此度は是非〳〵孫一郎をすくつてやれといひをるからそんなら貴樣がよく岡野の諸親類へ咄すがよからふとて虎之助が地主へ行て皆へ逢て此度の變事を左衞門太郎へとも〳〵頼んで工夫を頼むがよからふとておれを呼からいつたら親類中が偏に此度の一條はおまへの思召次第にして無難になるやう頼むと云から隨分片付て御目に掛よふと挨拶して御張衆へも逢て此度孫一郎を親共が一同の頼故丈助一件私が取計ふ手段も有之から取しきりて事定致しますが日向守殿の思召はないかといつたら御張衆が悦で左やう相成さへ致せは御頭は申に及す是迄通り相番私共迄大慶でござるから何分御頼申といふから諸親類から連名の一札をとりて孫一よりも此度一條に付外々より一切口入等出させまいと云證文をとり金談其外貴樣思召次第になし被下と云書付を取てそこで皆々へ向ておれが云には丈助一件は少も此上は私が引受るからは決て皆樣の御了簡は聞ますまいが一ッ御咄しか有ますが夫は外でもないが此度丈助が工は失禮乍皆樣の思召が悪いからだ一體はづかの内に大金を出しやうもなし譬へ出したらば孫一郎樣が御身上はなをるはづたが以前の通り段々困窮におなり被成て此節

はきかひが一ッはいはとふ云譯かしりませんが一向に丈助が勤め中の功が見えぬと云物だ全くお行屆きがないから不審と私は思ひ升が何を云にも控帳をなくしたは孫一郎樣の御不念と思ふ故に此度丈助が立替金を返して事を濟しましやうか又は壹文もやらずに片付ませうか思召次第に致して上ませう尤丈助への勘定を致すには不殘渡しますから是で大金がいり升が御承知でござりませう兩樣の御挨拶次第で致し升といつたらば皆が相談をして勘定をして事濟にしやうと云から夫は返つて致易く去ながら不害の金をやるも私は氣かないといつたら皆が云にはとふすると金をやらぬにすむと聞から夫は御咄が出來ません是迄皆樣がおく病故丈助にいろ〳〵恥をさらされたのだ金をやらぬ樣にする法は今皆樣へ御咄し申して直に目でもおまはし被成るからいひませぬといつたらば皆がをかしな顏をしてゐた夫から先皆樣の御出の内に丈助へ理解を申聞て宅番所も長屋ばかりにして子供も丈助へ渡して番人衆へも今晩は安心して寢るやうにしませうから皆樣は御安堵なすつて御酒でも召上りませとて内へいひ付て酒五升出して皆へ呑せて丈助が宅へ行て掛合て直になつとくさせて女房子供も長家へ渡して其晩より番人壹人で事が濟だ故親類も御張衆も種々禮をいつて歸つたが地主にては此三四月は右のさわぎで上下ともつかれか翌日はみんなが朝寢をした夫から丈助を呼で對談して惣方證書を取替して金は十二月十九日渡す約束に定て當分手當として十五兩内渡をして是迄の通りに勘定濟迄は扶持方を渡してやつた故何事なく一日の内に片が付て翌日は一日遊びに出で夫から孫一方へいつたらば家内中が嬉しが

つて彼是といひおつた夫からは金の工夫をしたがしよせん江戸では出來ぬ故に攝州の知行所へ行く積りにして見た所が孫一郎方には久敷丈助が事で入用も過ぎて今日の手傳にも差支へ飯米も上下三四十人にてくふ米が壹升もないと云こと故に武州の知行所の者を呼出して十二月迄のまかなひを云付たら何といつても請ぬ故に段々理解を申渡して漸々になつとくして十二月迄の入用を請合たから夫から又々武州の次兵衛と云庄屋を呼で道中入用四十兩出させ是はおれが借にして十二月返す約束にして十一月九日に江戸を立た此年の七月支配へ有髮改名を願たが十月の十七日濟て脇阪中務少輔殿の御達しだから夫より左衛門太郎を改て夢醉といつた月代がまだ延ぬから當分は惣髮でゐた故に道中は岡野孫一郎家來左衛門太郎七と名乘て上阪した其時虎之助へ跡を賴で中仙道を登た故熊谷宿にて次左衛門から四十兩を受取て急で登たが道より氣分が惡くつて漸々押て大阪の八軒屋へ付て二三日逗留して夫から大阪のその崎と云所の加賀虎と云男を尋て其内へいつた幸ひ内に居たから江戸より登た譯を咄して金談を賴たら早速に受合て呉た夫から翌日御願塚と云孫一が村方へいつたが大阪よりは二里半有といつた代官の山田新右衛門と云内へ逗留して江戸の譯を咄して翌日一村の者を呼出して金談を談したが其時代官か云には地頭の高五百石の村方にて用立金が七百兩餘有故中々御入用の金子は一錢も出來ずといつたおれが江戸で用人孫一郎へも聞たらば五百兩も有と云から其積で來たら大きに違たから先其日は夫きりにし村方一同を歸したが誠に當惑したが併出來ぬと云事はないと思つたから毎日〳〵村方を

ぶら〳〵四五日歩行て見たが村中不殘ふにう故に少し心も安まつたから逗留中の入用を代官に聞たらば是迄出役の用人が來ると供壹人連てきて毎日〳〵十八匁づゝかゝると云からおれは上下五人で諸事けんやくをして肴を出しても不食代官のおふくろへ持せてやつて毎日〳〵一同共に嚴敷けんやくいひ渡して供の者へは夫々に手當をして伊丹へ時々やつて内々酒食をさせたらば入用が五人で十匁づゝだといつて嬉しがつたから右の金談はしすに大阪へ折々いつて遊では村方の樣子をみつみつ聞と金を出さすに退屈させて追ひ返す手段をすると聞たから毎晩〳〵新右衞門始子供のこらず前へ呼んでは昔よりの名將智勇の仁の咄しをして聞かすと何れも悦て夜の更るまで聞ては寢たが或日又々金談のことをいつたらば銀主がないと云から其時も其儘にして置たら江戸より連れていつた猪山勇八と云男が内々色々金子の事を强談した故に村方がさわぎ立て毎日毎日寄て村中が評議をして或時おれが旅宿を取廻て色々雜言をぬかして竹鎗抔を持出したから供の者はこわがつて江戸へ歸ると云からしかつてやつた夫より村内の寺へ集ては鐘を付ては押寄たみんな猪山か馬鹿なことを云ひふれたからたおれは一向かまはすして仲間を一人つれては御紋服をきて時々其同勢の中を通ると一同かくれた夫からおれか連た侍に堀田喜三郎と云男にいひ付て毎日〳〵晝前に大學經孝の講しやくをさせておれも聞く新右衞門らにも聞した新右衞門は實氣の者で大に悦て色々内證で金談をもすると云から今にだまして百姓ばらにあはをふかして金を出してやらふと思つて居る故逗留中はなんにも雜話は少しもいはず慎て居たがひ

ぜんができてこまるから毎日毎日伊丹の小山湯へはいりにいつてはかん者を付て置ては村方の容子を聞て計居たが色々村方の者がわるたくみをすると云からなんにもしらぬ顏で居た段々日數も立たら大阪へいつて町奉行の堀伊賀守の用人下山彌右衞門は元よりおれが色々と江戸で世話をした男故夫には孫一郎が家事のことをも能々しつて居るから内談して村方へ歸つたらば代官がおれに聞には御前は大阪の誰の所へいつたと云故伊賀守は元相弟子だから尋てきたといつたら夫はといつてこわがつたが二三日過ると大阪より大勢の供廻りの使者が來て伊賀守の口上を延て箱肴其外色々の物を送てよこしたから村中がみてきもをつぶし夢醉樣は御奉行樣と御懇意だとぬかして夫からは竹鎗又はとり卷を止たがおかしくつてならなかつた其肴を村役の者へ分てやりて外の物は代官の親類へ配てやつたが村中で御奉行樣の御肴だといつたとよ夫から少氣伏した樣子で金の手段をすると聞た故最早大丈夫とにらんだから代官へ申渡して能勢妙見へ參詣の事を申聞て供に是迄おれに敵立たやつら計連てゆこふと談して喜三郎壹人と跡は村方の惡盜どもを連て今日は孫一の家來ではいかぬおれが參詣だといつて御紋服を着て鎗箱でいつたが其時新右衞門へ云には雨具を不殘持參するやうといつたら拶拶には此節は日寄がよいから五六日は雨は降ませぬから是は持なといふからおれが云には元より妙見を信仰するから必ず祈ると大雨がいつも降から是非とも持と云故不省〳〵物持を壹人出した夫から池田へいつて休だが駕籠の雨具がないから取に返して雨具を持て來たから段々能勢山へいつたが天氣がよくつて山上より

大阪尼ヶ崎攝津の浦々を一目に見て其日は別て暖氣で袷壹ッ山を上るにあせが出る程だが中々雨抔は降ふと誰も思はぬ故雨具持が壹人腹を立ていつた麓の茶屋へかごを預け二十五丁絶頂を登たが漸々に妙見宮へ來たから夫から水行をして本堂へ上たら大勢が見て御紋服に恐れし故や皆々外へにげ出したから靜に拜をして門の外の茶屋に休で夫から段々山を下つたが半分計もくると有馬の六甲山より雨雲が段々出てきたが其時におれが合羽持に云には今に雨が降から手前は仕合だ荷が輕くなるといつたらばみんなが譬へ雲が出ても雨は降ませんと云おれが云には下のはたごやへ行まで降せたくないとて急で山を下ると二十五丁の峰を下ると大雨が降てきてはたごやへ三丁許にして供の者はずぶぬれになつたおれはかご故に困らぬ夫から其夜中をやすみなく大風雨にして明方七ッ過に漸々雨がやんだが其時におれはこたつへあたつて油斷をしずに萬端氣を付たが是は悪盜共を供に連た故若も不時の變があらふとはいはれぬ故だ其晩供にきたやつらは云には夢醉樣は奇妙の御方だ雨の降を昨日からしつて居なさる夫には神樣の納受が有と見える御旗本は違た者だ此方が百日參つてもこんなことはならぬとぬかして屈伏した容子故しめたと思つた夫から翌日そこより多田權現へ近く其日の七ッ時分御願塚村へ歸つたが其夜ひそかに猪山が寢所へきて村中が雨の事で驚てみんなが色々と氣を替た樣子でどうか金が出來そうに成てきましたと云からおれも悅んで居たが翌晩又々容子を聞すと金を出そうと云者と出すまいと云者半分宛になつたと聞たから翌日早く起て喜三郎を留守に置て大阪へいつて日本橋へ芝居を

見にいつて歸りに下山彌右衛門へ寄て又々談て八軒やへ泊て翌日村方へ歸た其翌日又々大阪よりして使へ色々肴を持て伊賀守の故紙がきた夫を又其晩には責させて代官初め庄屋呼寄て振舞て手紙をよんで聞せた故一同に氣伏した樣子が顏に顯はれた故咄しに金主の事を聞たらば今に色々骨折て居るが出來ぬと云から其晩は別れて寢たが翌日朝に成て新右衛門を呼で云には今日は少おれが悅があるから七ッ過より村方一同へ酒を振舞てやりたいから入用は渡すから尼ヶ崎よりよい肴を買て吸物其外萬事念を入て呉ろといひ付て其日のこん立を書付て置たを渡して早く入湯がしたいから湯をわかせとて髮を喜三郎に結せて座敷へ引散した物を片付させて湯へはいり不殘連て伊丹の牛頭天王へ參詣するといつて伊丹へいつて白子やと云呉服屋へはいりて諸麻の上下三具と孫一が紋付の羽織白むく二ッ今八ッ時迄拵て呉ろといつたらこくもちなら受合と云から其代を拂て取によこすと約束して村方へ歸たら九ッ過だ夫から家來へは道々其晩の狂言をいひ含て喜三郎を呼で床間へ白椿を生させ彼是すると七ッ半にもなつた故村方一同に代官か所へ集りて料理も出來た故一同座敷へ呼でおれが云には今日は悅の事が有て不殘まねいたが能こそ一同揃てきて忝ない今日は遠慮なく自分の內の通りくつろひて酒をたんと呑で呉とて一同へ盃を次第〳〵さして其上で隱し藝のある者は何でもするがいゝといつておれが昔吉原をひやかした時分の覺たはやり歌をうたつて聞して一同とも高下なく打とけろとて酒を呑したら金の談しと違つて一同笑つて悅で色々草うたひやら出たら次第をいひおつて醉も段々廻るから最早湯づ

けを食ふがいゝとて一同食じまいで禮を延て次へ引から兼ていひ付た故中間が庭へ水を手桶に三ばい汲できたから夫をあひて白むくをきて其上へ時服をきて座敷の眞中へ蒲團を重ねてしき燭臺を左右へ並べてふとんの上へすはつてゐて新右衛門初め村方の者へも申渡す事が有から座敷へ出るやうにといはせたら一同が給醉てゐる故明日仰渡をきゝたいと云から明日は兼て大阪へ參る約束故四五日留守だから一同寄て居る所が幸だから皆々服を改て地頭の口達を聞といつたらば皆漸々出たから其時に喜三郎が次の間より一同揃しと云から聞のから紙を開かせて其時一同が平伏した故おれが一同へ云には外の事でもないが先月より段々孫一郎が此度丈助一條に付ては金談を申渡す處其方共一同内談して下知の趣を聞入ずして銘々おのが身の用心計して一向地頭は外事にする段不屆の至り是に寄ては金談相斷るから左様心得ろと云と一同共難有段受をしたからおれが云には此度其方共の地頭の餘義なき賴故に病身を凌で上阪して其方中へ何分賴むと云一言を今迄の用人同様心得取合ず此段不埒千萬と云ひ其上に此方に向て竹鎗さんまい是又何と心得て右様の扱ひに及し其子細をきこふ其答へに寄ては急度堀伊賀守へ談し明日きうめいするから拶拶に及べといつたらば一同答もなく平伏して幾重にも此段は私共が心御違ひ何卒御慈悲に御免し被下とて涙を出して詫るから夫程迄云故に愚昧の百姓とも故差免し可申とておれが又々新右衛門へ云には右の段々恐入と云上は免し遣す夫に付ては代官始村役人共へ別段の賴がある聞屆て呉ぬかといつたら一同とも私ともの身分の義御免の上は御前さまの義は身分に應じ

候事は御請を仕ると云から又おれが賴は外でもないが今度孫一郎一件に付ては先達から申聞る通り江戸にては太田備後守始諸番頭親類中不殘寄てそふどふ故に中々今こゝに云より一同心配して丈助に身をなげて掛合故一ゑん片付ずして評定所にもなる所故夢醉は見るに忍ず先々一條を取扱て事濟にならんとするか金子の一段出來ず夫れ故に上阪して一同へ談しに及んだが孫一が借用金多く一同迷惑のよし隨分少は其理はなきにもあらんが其方共は岡野江雪以來此土地へ住て地頭の恩の深き事はまた代々の地頭の恩とおれは思ふぞ其地頭の家名に及ぶ程の事を見捨るはきんじうにもおとるとおれは思ふ故此度の談事はしたのだ又千兩や二千兩の金は俺が大阪の奉行へ賴んだら只今直に出來るは知れてゐる夫では江雪齋より知行所を拜領したせんは有まい其譯は孫一郎が家名に懸ることに知行を捨て他借して家を立たといつては第一先祖へ不孝にして民の從ぬ故と世間流布ことは身を立家を起す事も出來まい朋友へも顏が向られまいと思ふ故に其方共一同へ此度の功を立させて主從安堵して一同の義心のあらはれ世間のそしりもぬける様と思たに如何にも金談出來ぬから夢醉が志は無になつた故何事も仕出した事がなく江戸へは歸れぬ故今晩自殺して江戸への申譯はたてるから代官村役人へ賴は夢醉の亡骸をは各々相談して役人共付添て江戸表の悴へ渡てくれろ又勇八は直に此書狀を持て歸國して孫一郎へ渡してくれろ跡の供は是迄色々深切に世話もした故に兼て夫々へ預た金を不殘やるから明日にも立退て心の儘にするがいゝ喜三郎は江戸より兼々約定もして來た故今晩は太義ながらかいしやくを賴から

其上に歸國して妻子へ能く此一條を咄し吳よ最早外に云ことはないから此上は時服は村役人の内へ預け置てけがれぬ様にしろとてぬいて廣ふたへのせて喜三郎へおれが刀を渡して是がかいしやくしろと云付て兼て江戸にて拵へて持て行た首桶を出させて一同へ向て右賴事能々心得ろと云つゝ脇差を拔てきれで卷て一同免すから顏を上て夢醉が自さつをよく〳〵見ておけといつて脇差を取直す一同が恐れながら御免〳〵といつてふとんのそばへ寄たり喜三郎に早く打といつたら平伏してゐるからわれには賴まぬと云と是非なく立て後へ廻たそふすると三四人喜三郎に取付てしばらくお見合下されませ一同が一言申上る事が有升と云から喜三郎は早く申上ろといつたら先達よりの仰の義は畏ました我々家財を賣ても御受致し升といひをるから最早今になつては聞入ぬといつたらば何卒御生かいをとゝまり吳ろとて色々涙ながら賴故に刄物を鞘へ納めたら新右衞門は腰がぬけてよふ〳〵いざり出て云には全く私が御代官を勤ながら行屆きませぬからせめては私が首を切て江戸へ送れと云からおれが云には此度の事は一同私慾にのみして是迄地頭を輕しむる事故だ譬へおれは隱居だから世の中へ望みはないから如何樣に成ても大勢が助かりて丈助も夢醉が死だと聞たらばよもや一條も手輕に濟だらふと思た故に一同とも彌々請をするからには身命に替て調達すると云一札を出せといつたらば直に連名して出したから受取た金子はいつ迄に上ませうと云から明日四ッ時迄といつてやつたら長り升と云たから猶々喜三郎も一同へ談して萬一間違時はわたしらか切腹するから出精しろと嚴敷いつておどしたらみんなが

こわがつて翌日四ッ前に三方へのせて五百五十兩出したから請取て夫から跡は五十兩歸國迄に江戸島や迄屆る約束にした孫一郎が暮し方三百三十兩を來年は二百兩にして吳ろといひをるが少もげんじはならぬとて聞入ず夫から猪山勇八一昨年から四百兩の横領が有から當人をくれろせんさくをしたいから此願は是非とも聞濟樣との一同の訴狀故用濟の上引渡し遣すと聞き屆た故勇八は振ひゐるから内々安堵する樣に申聞て夫から村方の是迄彼是と敵だつた者を夫々咎をいひ付水呑に落して江雪以來の古百姓へ役義をいひ付此度金を拵へし者は不殘名字を免じ代官へは居屋敷荒地一ヶ年九斗餘の所を遣して夫々羽織上下を遣し夕方に漸々事濟になつたから明日は京都へ見物に行から人足をいひ付て先觸を出すべしとて江戸より持し道具は不殘持行べしと云付て支度をさせ何れ勇八郎はいまだ要用も有から京都より村方へ歸て引渡し遣すべしとて供をしろとて其晩は皆々打解て咄しをしてゐると宇市源右衞門と云兩人が願書を出したから見ると孫一より證文の有金が百五十兩此暮渡す書付故に代官へいひ付て年延を申聞ろと云と兩人を次の間へ呼で右の段を申渡兩人は彼是と云故に其時おれが出て其書付を見せろと取上て燭臺の火へかざし見るふりをして燒てしまつたら兩人が色をかへてぐづ〳〵云からおれがしたが彼是云は如何の心得た其方兩人は別ておれに是迄刄向ふたが格別の勘辨をして置に不屆のやつだとおどかしてやつたらば大にこわがつた故此證文は夢醉が貰て置とて立て座敷へはいつたら兩人は恐入ましたとて早々歸つた故百五十兩は一言にてふんでしまつた何でも人は勢ひがかんじんだと

思つて翌日は七ッ立をして京へいつたが村中何ともいはなんだ京都へ行き三條の橋脇に三日逗留してほんとふに休足をして東海道を下た大磯へ泊た晩に髪を切てなで付になつて江戸へ歸た川崎へ泊て内へ案内をしたから大勢迎ひにきて十二月九日に歸つた夫から右金子を持て孫一の方へいつたらば皆が出て神様の樣にいつた夫から中一日置て丈助を呼出して立替金三百三十九兩餘不殘渡して親類の書付迄取て孫一え渡した其翌日内の祖母が死だから色々佛事にかゝつた武州相州の知行所の者が百兩は上阪しても出來まいといつたが一同ともきもをけしおつた孫一が親類の中にも五十兩出來たら勤を引といつたやつらも有たがたたましてやつた虎之助も大に悅だ大川丈助は生涯あなた樣の方へ足をしては寢ませんといつたが今に折々は機嫌を聞にくる夫から其年の暮の始末を不殘して初て孫一の代になつてこんな年越をしたと地主の一同が寄て馳走をしてくれた併ながら金を拵るに是程の骨を折たは是迄一番だ丈助一件へかゝつた者は皆々おれを恐た其替りには道中内は家來四人共江戸迄かごに乘て連てきたから一同が悅んだ往復で入用が六十七八兩かゝつた翌年春は忌明に成たから諸々を遊で面白く暮した去年丈助一件の禮に孫一から丈助返金の殘りは遣へといつたが夫では暮の孫一が手當がないから壹文も貰はなかつた故家内中が相談して木綿の反物一反くれた世間ではおれに百兩も取れといつたがおれが考で取ぬ

夫からは遊ぶが商賣ごとと云事なく出て歩行たが小遣にも困るから道具屋もするし色々こんたんをし

て居ると頭より攝州へいつた尻が出て他行留をいひ渡されたから二月より九月初迄内に計居たがせつないものだから夫から孫一郎へ咄して引籠中おれが手當を貰た一月に金壹兩貳分に四人扶持宛貰た毎日〳〵庭をいぢつてなぐさみにして居た九月に成て友達が頭へ出歩行の事をいつて攝州の旅行は全く夢醉がなぐさみの事ではないとて孫一郎が事を荒增にいひ上臭たらばそれは無餘義ことだ併關所を越たは不埒だが最早愼みも能からとて免して他行をしろといひ渡したから久敷の内とぢこもつたから諸方へ飛歩行た此年中二階を建たが茶を始た故に又々圍ひを拵へて竹内と云從弟の隱居と色々道具を買集たが慾にはほふづのない物故又々金がほしく成たから近所初前町の切みせから一同に夫々分付て金を借たが三日の内に金が貳拾六兩寄たから色々茶器の物を買て毎日〳〵其事に計かゝつてゐた夫からは金がなくなると女郎やより借たり彼是と七八十兩計取た地主中間部やへいひ付てごろつきを二十人計置て給金なしに遣た隣町三ケ町大じ者女郎や町中から五節句を地主共が持て來る故よかつた其上に女郎やへ上つてあばれる者は不殘尻を出したから所の防ぎに成たから長屋一むねから貳分宛不殘で七兩貳分宛盆暮看代にくれた四軒からも壹年に貳兩づゝよこした是も壹年には五六十兩に成た其上にあばれ者の茶屋をさわがす度毎におれにいつたから人を出して濟してやるから其度毎に貳分三分づゝに成たが仕舞には前町へ見せ或は商ひ物を出すにも付屆をしたから何の事はない所の旦那のやうだ金はわく物の樣にして遣たが其翌年二月から氣分惡く成て大病に成たものだから色々療治をしたらば八月

末に少よく成たから押てさわいで歩行たがとふとふ十二月初から大病に成たからだがむくみて寢返りも出來ぬ樣に成たが餘り大そふに威をふるつた故頭より尻が出て其月の二十二日に虎の門の内の保科榮次郎と云息子が相支配へ押こめられた大病故にかごできたが漸々翌年の夏頃に全快したさふすると本所でおれが貸た道具も金も十四兩計は出して置たがなんにもみんながよこさない樣に成たおれはしらないでふいに保科へ來たから心當りは不斷何もしないで居た故に今はびんぼうして困るが仕方がないと漸々あきらめた。

おれがまだ隱居しない年だ本所の北割下水の能勢妙見宮へ神鏡を一面寄進しやうと思つて講中へも談して十二兩かゝるから金を集たが其時に妙見へ毎日參詣する中で中村多仲と云紀州殿の金を取扱ふ役人だといつて立派の侍が日參してくるから講中が神鏡の咄しをしたらば夫は何寄の事だからわしも加入しやうといつて三兩の施主に付た故皆が悅て多仲樣多仲樣といつたが段々と金が寄て十二兩に成たからおれに預てゐろといふ故斷たらば相談の上多仲へ預たら其晩に多仲が其金を持て行方がなくなつたから方々さがしたが一向に手掛がなかつた或日其咄しを竹内平右衞門にしたらば夫は中に云ひん用師と云物だと敎てくれたから其譯を聞たら其ひん用は不斷はりつはのなりでゐて或は神社又は參詣の多い寺又世の中の講しやく場色々の所へいつて神へは信心の樣になりて人の目に立樣にして諸山の金の世話人の樣にして人々をたまして前禮の金子を取て住居を立退て又々外ではめるが一年中小商賣に

して居る者だ其中間が數十人有て不殘町同心並岡つぴきへの付屆をして居るから大丈夫の仕事だと敎てくれた萬一やかましくなると中間が寄て色々其時の模樣に寄ては當人を貰に來るものだが其多仲もひん用師とて笑た又飛よふしと云者は道中で藥又は品を賣て田舍をたばかる者だ是もひん用の少し下たのだと敎た岡野に居る時だが芝の山内の金を貸とて本所でおれが知つて居る知行取旗本が七八人其金を貸たかつてひん用に金をとられたが長谷川と云友達が取て困てゐるからおれが竹内から聞て居たから其金を取た石川五老と云男を呼付て金を取返してやつた又勝田養元といふ男も藤澤次右衞と云者に前禮を取れて其男の住所がしれず困たから居所をさがし出て其金を引返してやつた又或時だが長谷川寛次郎が又々齋藤監物と云者に逢て金談をしたが或日齋藤が長谷川へきて色々金談をしてゐたが長谷川では金が借たいから酒を出してもてなし咄して居る内に齋藤が銀山の銀の吹寄をみせた故に長谷川も珍しかりて家内の者へ見せるとてはいりて内中へ見せて元の座敷へ出て銀をばそばへ置て酒を呑でゐたまぎれに其銀がなくなつて監物が只今の品を御返し被下と云から方々をさがしたがない故に何れ跡より尋出して上やうとて挨拶をして其日は齋藤が宅へ歸つたがいくらさがしても銀がないから或日又齋藤が來て云には先日の御覽に入た銀は紀州の御國の銀山より始て取たぎんだ夫は最早紀伊樣の御覽に入た品故當分は私へ御預けになつてをり升品故に行品のしれぬと大變になり升からと段々とだまして長谷川より五兩銀の代を取たから長谷川へは最早金談は出來ぬと斷た故家内一同に困たが又林

丁の今井三次郎と云仁の金談にも懸つて紀州の高野の金を世話をするといつて壹兩貳分とりて前廣より右の會所の役人へ挨拶にするとだまして夫れきりにしたり今井とは馬の相弟子で不斷懇意にしたが或日今井が尋てくれていろいろ咄しの内に長谷川が監物にかたられた咄しをしたらば今井が手前も同斷の由云から監物の居所を聞たらば淺草日恩院の地面にゐると云から其金を取てやらふといつたらば夫は助才なく同心迄かけたがとれぬと云故受合て取てやらふといつて今井を歸して二三日過て齋藤監物の旅宿にいつたが夫は大そふにしてゐて座敷には神前をかざりて熊皮の三疊敷計のをすゐて黑ちりめんの綿入羽織をきて刀掛には金拵の大小を掛て隅の方には兩掛を置て明荷をつみ座敷の道具もわつはの物計並べて自身ははんしゆのじゆづをつまくり何か容體らしくして小者が取次に出たから名をいつて座敷へ通る監物は袴をはゐておれに出て挨拶をしたら初ての名乘をしていろ〳〵信心の咄しをしてから中村多仲がわしが所へくると云咄しをして其上にて兼ておまへは多仲の御仲間の由は疾より多仲より聞てゐたが兎角わしが世話敷て尋もしない由を尤らしくいつたらば赤面してゐたが何が小吉へさゝやいたが程なくして吸物酒肴を出して馳走したからいゝかげんに呑て色々ひんよふの咄しをして多仲を毎度わしがつかつたが今は妙見の一條からは行衛をしらぬと咄したら今は下總にゐるといつたからおまへは仕かけかりつはたからさそよい仕事が出來るだろふといつてやつたらそこで漸漸ひん用を白狀して何ぞ遣つて呉といつた夫から付こんで今井の譯を咄して金を取返して別れて歸たが何も其

道より入は返て向ふは商賣人故に隱すものではない物だといつて今井に金を渡したらば厚く禮をして歸た夫から二三日すると監物がいろいろ土産を持ておれが内へきたから色々用につかつたからそこで世間の惡法の事を多くしつた長谷川へも監物が事を咄して聞せたら大きに恐たしよせん御番士顏で大きな顏計してゐては世の中の事は其樣には知れぬものだ

おれが山口へ居た内だか或女にほれて困た事が有たが其時におれが女房が其女を貰てやらふといひおるから賴だらば私へ暇をくれといふから夫はなぜだといつたら女の内へ私が參つて是非とも貰ひますから先も武士だから挨拶が惡ひと私が死でもらひますからといつた其時に短刀を女房へ渡したが今晩參つて急と連てくるといふがらおれは外へ遊びにいつたらば南平に出先で出合故何事なしに咄して居たらば南平か云には勝樣は女なんの相が嚴しい心當りはないかと尋るから右の次第を咄したらば夫は能なすつたと云から別れて又々關川さぬきと云易者と心易いから通り掛に寄たらあなたは大變だ上れと云故上へ通たらば女なんの事をいひおつて今晩は劍難が有か人が大勢いたむだらふとて心當りはないかと尋るから始めよりの事を咄したらばきもをつぶして段々深切に異見をして呉て女房は貞實だといつて以來は情を懸てやれと色々云から考て見たらおれが心得違だから夕方内へ飛で歸たら隱居に娘をだかせて男谷へ遣つて女房は書置をして内を出る處へ歸て夫から漸々止て何事もなかつたが是迄度々女房にも助けられし事も有た夫からは不便を懸て遣つたが夫迄は一日でもおれに叩かれぬと云事は

なかつた此四五年俄に病身になつたも其せいかもしれぬと思ふから隱居樣の樣にして置は
おれが隱居する前年だか吉原が燒て諸方へ假宅が出來た其外山の宿の佐野つちやの二階で端場の錢座
の息子熊と云者と大けんくわをしたが熊を二階から下へなげ出してやつたが其時錢座の手代が二三人
きて熊を連て歸たが少し過ると三十人計長かきて來てさのつちやをとりまいたからおれがはだをぬい
でじゆばん壹つで高もゝ立を取て飛出してたゝき合たが三度二三町追返した其時に會所から大勢出て
引分たが夫からは山の宿でも女郎や一同に客を送るばゞアもかゝアもおれが顏をしたからよけよけし
をつた故何も間違がなかつた其時は刀は二尺五寸の刀を差てゐた山の宿中女郎や三日戸をしめたが事
なく濟だ其外所々にてのけんくわ幾度も有たがたひがい忘れた淺草市で多羅尾七郎三郎と男谷忠次郎
と其外五六人でいつた時は貳尺八寸の關の金〇の刀をさしたが是はさやの小尻に犬〇〇〇きかつけて
有た夫に急に七郎三郎がさそつた故袴をはかずにいつたから雷門の內で込合故に刀がまたぐらへはい
つてあるかれなかつたが押合て行と侍が多羅尾のあたまをさんしよのすりこ木でぶつたからおれが押
れながらそいつの羽織をおさへたらば摺木で又おれのかたをぶちをつた故刀を拔ふとしたら小尻がつ
かへたから片はしから切倒すと大聲上たらば通りの者がぱつと散たから拔打に其の男のにげる處をあ
びせたらば間合が遠くて切先で脊を下迄切下たから帶が切て大小も懷中物も不殘おとしてにげたがそ
ふすると傳ぼう院の辻番から棒を持て壹人出たから二三べん刀をふり廻してやつたら往來の者が半丁

計散たから大小と鼻紙入をひろひて辻番の內へなげこんだそれから直に奧山へいつた漸々切先が壹寸
半もかゝつたと思つた大勢の込合場は長刀もよし惡たと思つた多羅尾ははげあたま故にきづが付た夫
から段々けんくわをしながら兩國橋迄きたが其晩は何も外には仕事がないから內へ歸つた其外にも色
々樣々の事が有たが久しくなるから思ひ出されぬおれは一生の內に無法の馬鹿な事をして年月を送た
けれどもいまだ天道の罰もあたらぬと見えて何事なく四十二年かうして居るが身內にきづ壹ツも受た
事がない其外の者は或はぶちころされ又は行衞がしらずいろいろの身に成た物が數しれぬがおれは高
運だとみえて我儘のしたい程して小高の者はおれの樣に金を遣つたものもなしいつもりきんで配下を
多く遣つた衣類は大がひ人のきぬ唐物其外の結構の物をきて甘ひものは食ひ次第にして一生女郎は好
に買て十分の事をしてきたが此頃に成て漸々人間らしく成て昔の事を思ふと身の毛が立やうだ男たる
ものは決ておれが眞似をはしないかいゝ孫やひこが出來たらはよくよく此書物をみせて身のいましめ
にするがいゝ今は書にも氣のはづかしい是と云も無學にして手跡も漸く二十餘に成て手前の小用が出
來るやうに成て好友達もなく惡友計と交つた故よき事は少しも氣が付ぬから此樣の法外の事を英勇ご
ふけつと思た故みな心得違して親類父母妻子に迄いくらのく勞を懸けたかしれぬかんじんの旦那へは
不忠至極をして頭取扱も不斷に敵對してとふとふ今の如くの身上に成た幸に息子が能つて孝道してく
れ又娘がよくつかへて女房がおれにそむかない故に滿足で此年まで無難に通たのだ四十二に成て始て

人倫の道かつは君父へつかへる事諸親へむつみ又は妻子下人の仁愛の道を少ししつたら是迄の所行がおそろしく成たよくよく讀であちあふへし子に孫にまであなかしこ

干時天保十四寅年初於鶯谷書す

夢醉道人

昭和十六年三月一日印刷
昭和十六年三月五日發行

新維新十傑第七巻
定價 壹圓參拾錢

著者 伊藤仁太郎
發行者 下中彌三郎 東京市日本橋區馬喰町三ノ五
印制者 齋藤道太郎 東京市日本橋區馬喰町三ノ五

發行所 東京市日本橋區吳服橋三ノ五
平凡社
振替東京二九六三九番
電話日本橋三二五七・二二五八・二二五九

(第四回配本)

414
516

終

第4回配本